第2章　知識は必要か？

knowledge3.indd　61　2017/04/07　21:09:49

「知識なんてもう必要ない」という人がいる。知識だけでなく、能力も、スキルも、経験も、そういったものはもうなにも要らない。どんなことも、みんな、人工知能（ＡＩ）がうまくやってくれる。生きていくのに知識は必要ない。知識はもうなんの役にも立たない。そんなことを、あちらこちらで耳にする。

それとは反対に、「これからは、知識がなければ生きていけない」という人がいる。「知識のある人たち」と「知識のない人たち」の格差は、「カネのある人たち」と「カネのない人たち」の格差よりも、ずっと大きなものになるという。カネならば分配し直せばいいが、知識は再分配ができない。解決策のない深刻な問題だという。

ＩＣＴの「専門家」のなかには、「インターネットでサーチをすれば、どんなこともすぐにわかる。だから知識なんていらない」と言う人がいる。そうかと思えば、「知識のない人にサーチはできない」という人もいる。どちらの意見も正しいように思えるし、両方とも間違っているようにも思える。

知識の「専門家」のなかには、「情報と違って、知識はビジネスには馴染まない。知識でカネを儲けようと考えるのは間違いだ」と言う人がいて、また、「知識の創出のためには、そして知識の共有や活用のためには、まずカネが必要だ」と言う人もいる。知識がカネを生み出すのか、生み出さないのか。知識はなんのために必要なのか。

この章では、そういったことについて考えてみたい。

knowledge3.indd 62 2017/04/07 21:09:49

2・1　知識はもう要らない

インターネットの普及は、知識のあり方を大きく変えてきた。膨大な量のデータが蓄積され、いつでも取り出すことができるようになり、記憶することの意味が薄れてきた。百科事典のような人と言っても、インターネットを通して得られる情報には遠く及ばない。新しい環境のなかで知識の立ち位置は、そして知識の意味は、どのように変わっていくのか。そんなことが無性に気になる。

知らなくても知識？

サミュエル・ジョンソン（Samuel Johnson）は、知識には二種類あるという。ひとつは知っていること、もうひとつはどうすれば知ることができるかを知っていること。知らなくても、どこで、どのようにして見つけるかを知っていれば、知っているに等しいというのだ。

だったら、インターネットでサーチすればなんでも見つかるのだから、すべてのことが知識ということになってしまわないか。

知らないことでも、知識というのだろうか。

knowledge3.indd 63　2017/04/07 21:09:49

サーチがあるから、もう知識はいらない

知識社会の到来でこれからは知識がなければやっていけないという人がいたかと思えば、サーチをすればどんな知識でもすぐに手に入るのだから知識なんてなくてもやっていけるという人もいる。知識がなければまともなサーチはできないという人がいるかと思うと、知識がサーチの邪魔をするから知識なんてないほうがいいという人もいる。

佐藤伸治は歌のなかで「知識はいらない」と繰り返したが、それは佐藤伸治だけのフレーズではない。実際、「知識なんて必要ない」「知識はもういらない」という人は多い。

「インターネットのサーチを使えばなんでも見つかるのだから、もう知識はいらない」とか、「頭のなかに知識を詰め込んだところで、もうなんの役にも立たない」というような、そんなことを繰り返し聞かされていると、不思議なことに「そうかなあ、そうかもしれないなあ」なんて思ってしまう。

本当に知識なしで生きて行けるようになったのだろうか。

ダニエル・ベル（Daniel Bell）は、「道理にかなった判断や実験の結果が、メディアなどによって人々に体系的に伝えられたときに、はじめて、事実や考えは知識になる」と書いている。どんなに正しい事実も、どんなに良い考えも、他の人に伝えられることがなければ知識ではないと言い、そしてまた、たとえ伝えられたとしても、伝えられた側が理解しなかったり価値を見出さなかったりすれば、知識にはならないと言うのだ。

インターネットで見つかるからといっても、見つかったことが理解できなかったり、見つかったことに価値を見出せなかったりすれば、それは知識にはならない。つまり意味がないということになる。

もし、ベルの書いたことが正しいとするならば、私たちは理想的な社会にいることになる。どんな事実も

knowledge3.indd 64 2017/04/07 21:09:49

どんな考えも、インターネットによって伝えることができる。社会の知識は、そしてそこにいる人たちの知識は、無限に増え続ける。

ところが実際は、そうではない。私たちの知識が増えているという実感は、誰にもない。それはなぜかと考えることが、知識の理解につながる。

ウィリアム・ショックレー（William Shockley III）は、組織内の知識について、知識を創り出すのはコンピュータ・システムではなく、そこで働く人の集まりなのだと繰り返し書いた。人が集まることで、情報が提供され、集められ、発信され、理解される。そして、現在という特定の時点における組織にとっての最適な判断が下される。判断をするのは、情報を持ったコンピュータ・システムではなく、知識を共有した人の集まりだというのだ。

ショックレーは、「適切な情報を適切な時に使う（using the right information at the right time）」ことで判断ができるのは、人の集まりであって、コンピュータ・システムではないという。

人工知能（ＡＩ）が「適切な情報を適切な時に使う」ことができるようになれば、つまり人の集まりが持つ知識を超えることができるようになれば、人工知能は人を超えることになる。つまり人工知能は、どんなに沢山の情報を持つようになっても、知識を持たない限りは、人の集まりを超えることはないというのだ。

ヴィクトル・ユーゴー（Victor Hugo）は、「武力による侵略は必ずといっていいくらい抵抗に遭うが、時に合った考えはあっさりと受け入れられる」と言った。

時に合った考えというのは、知識だ。知識は、時と場所と人とが合いさえすれば、とんでもない力を発揮する。

ここで、ベルの「伝えられた側が理解しなかったり価値を見出せなかったりすれば、知識にはならない」

knowledge3.indd 65　2017/04/07 21:09:49

という言葉を、言い換えれば、「伝えられた側の考え方ひとつで、知識になるかどうかが決まる」ということを、もう一度考えてみたい。

難民のこと、災害のことなどのことが伝えられたとき、そのことを自分のこととして考えることができるかどうか。「自分が明日、難民になるかもしれない」とか、「災害が明日、自分の身に降りかかるかもしれない」というような想像をめぐらすことができるかどうか。想像をめぐらし、自分のこととして考えられる人には、伝えられたことが知識になる。でも、そうでない人には、知識にはならない。

ただ知るだけなら、誰にでもできる。でも知るだけでは知識にはならない。知って理解して考えて、それではじめて知識になる。そしてその時、どんな価値を持っているかが、理解や考えがどんなものになるのかを決める。

こうして考えてくると、「知識は必要か?」という問いがバカバカしいものに思えてくる。知るだけでなく、理解し考える。その基盤となる価値をしっかり持っておく。そうしなければ、どんなことを知っても、知識にはならない。

知識のなかには、事実というより意見といったほうがいいものや、信じているもの、そして譲れないものもある。私たちの知識の大半は自分だけの知識であり、他人にとってはあまり意味のない、必要でない知識だということは覚えておく必要がある。

インターネット上の情報のせいで、すべての事柄に賛成意見と反対意見とが溢れかえっている。不思議なことに、自分が賛成だと賛成意見ばかりに目が行き、反対だと反対意見ばかりに目が行く。そして、「自分の意見は絶対に正しく、他の意見は絶対に間違っている」という人ばかりになってゆく。

たとえ話し合うことがあっても誰も自分の考えを変えないし、そもそも反対の側の意見はなにも聞いてい

knowledge3.indd 66 2017/04/07 21:09:49

ない。人間というのは実に不可解だ。口では「話せばわかり合える」と言っておきながら、心のなかでは「私の言うことを聞いて、私の言う通りにしろ」と思っている。そんな人に限って討論が好きで、自分の意見を声高に叫んでは悦にいっている。困ったことに、討論が好きな人は、私のように討論が好きでない者に向かって、「意識が低い」などと言ってなじる。若い頃から何度、そういう人から「意識が低い」と言われてきたことか。

意識なんて高かろうが低かろうが構わない。どんな知識を持とうと自由なはず。人の知識を「間違っている」と非難し、知識を共有していないからといって「意識が低い」と決めつけるのは、とても嫌だ。同じ知識を持たないのは、そして人と違うことを考えるのは、決して悪いことではない。

どんな知識も知識なのだ

「マンハッタンに一人で行けば、これだけ楽しいことがある」という知識も、「フランスの田舎に二人で行けば、これだけおいしいものに出会える」という知識も、立派な知識だ。「そんなのは知識ではなく、単なる好みだ」という人がいるかもしれないが、そういうことこそ大事だと思っている人もいる。

「あの人は悪い人だけれど、家族にはいい人」とか「あの馬は重馬場に弱い」というような知識については、「そんなのは知識ではなく、ただの意見だ」という人もいれば、「いや、それは意見でも見方でもなく、立派な知識だ」という人もいる。

競馬の話が出てきたので、ギャンブルについて少しだけ書いておく。世の中にはいろいろなギャンブルがあるが、どれもなかなか難しい。ギャンブルなんて誰にでもできると言う人もいるが、そんなに甘いもので

knowledge3.indd 67　2017/04/07 21:09:49

はない。賭場もカジノも遊技場も、知識なしでは近づけない。なにも知らずに馬券や車券や舟券を買う人はあまりいない。宝くじを買うのに知識が必要かどうかは知らないが、ほとんどのギャンブルには知識がついてまわる。

実際、ギャンブルの予想をする人たちの知識と表現力の豊かさには、驚くべきものがある。そもそも当たるかどうかわからないことに関する知識だから、どのデータに重きを置くかというような論理的なことだけでなく、なにを信じるかという直感のようなものにも重きが置かれる。「この騎手だから」、「雨だから」、「左回りだから」、「距離が短いから」といった理由づけだけではない、「勘」と「度胸」と「いい加減さ」、そして「はったり」。知識を持っているかどうかとは関係なく勝った人が笑うという、実にわかりやすい世界では、論理以上のものが要求される。

どこかに似たような世界があったなあと思ったら、そう、経済。経済予測は競馬の予測とそっくりで、「こうなります」と言って、たとえそうならなくても、誰もなんとも思わない。もちろん誰も責任を取らない。予測が外れるのはあたりまえのことなのだ。

「災害が起きたから」、「天候が悪かったから」、「輸出が増えたから」、「原油価格が下がったから」といった経済の専門家たちの言い訳を聞いていると、「位置取りが悪かったから」、「馬場が向かなかったから」、「展開が予想外だったから」、「ペースが遅かったから」という競馬の専門家たちの言い訳を思い出す。どちらも「予想外のことが起きたから」という言い訳を持ってくるところも、とてもよく似ている。経済の専門家の仕事と競馬の専門家の仕事は、本質的には同じなのだろう。「予測出来ないことが起きるだろう」などという予測は、そんな専門家たちにしかできない。

経済のなかでも、株価の予想や為替レートの予想は、ギャンブルに一番近い。競馬をギャンブルと呼び、

knowledge3.indd 68 2017/04/07 21:09:49

株を投資と呼んでも、本質は同じ。ただ、経済の分析とか予測となると、ギャンブルとは少し違い、嘘がより多く入り込んでくる。

もう20年以上も前のことだが、ある日、経済の専門家たちが話をするのに同席していた。ハンガリーの経済のことだった。二人の経済の専門家は、報告書のなかに「ハンガリーの経済は良くなってきていると書こう」と言った。他の二人は「悪いものは悪いと書くべきだ」という立場だった。「悪いと書けば、悪いものがもっと悪くなってしまうから、良くなってきていると書こう」というのも、「良くなってきていると書いて、良くなるように誘導するのは、私たちの仕事ではない」というのも、どちらも間違ってはいない。でも話をよく聞いていると、どちらの話にも嘘がある。私にはその嘘がおかしかった。

嘘があろうがなかろうが、経済や統計の専門家たちは、みんな明るい。きっと競馬予想の専門家たちも明るいのだろう。科学者やSF作家も含め、未来のことを考える仕事をしていると、性格が明るくなる。過去に縛られないからでもあるし、責任を持たないでいいからでもある。外れても「外れちゃった」と笑っていられるのは、とても羨ましい。

それに対して、法律の専門家たちは、なぜかみんな暗い。過去のことを「こうでもない」「ああでもない」とほじくり出し、「こうだ」とか「ああだ」とか決めつけようとする。私は法律に関わる人たちの「自分たちは正しい」という感じが苦手で、その人たちに対して多少の偏見を持っている。その偏見を短い話にすると、次のようになる。

白い布を見せられ「これは赤いだろ?」と聞かれる。「いや、白いけど」と答える。すると赤い光で布を照らし、「赤いだろ?」と聞く。「ランプのせいで、赤く見えるけど」と言うと、「赤だよね?」と聞かれる。「うん」と言う。すると紙の上に、「九島伸一は赤と言った」と書かれてしまう。

knowledge3.indd 69　2017/04/07 21:09:49

そんなことが、普通に起きてしまう。

裁判にかかわる人たちも、警察の人たちも、人権の専門家たちも、法律に関わる人はみんな、過去のことばかりを話す。いつ、どこにいたのか、誰と会っていたのか、何をしたのか。そんなことが、とても大事になる。「少し前のことなら覚えているけれど、半年前のこととなるとちょっと」なんていう言い方は、許されない。私のように昨日のことすらよく覚えていない人間には、法律関係の人と話すのはとてもつらい。

医療とか健康といったことをテーマにする職場の医者や公衆衛生の専門家の人たちは、エビデンス・ベースト（evidence-based）という言葉をよく口にした。エビデンス・ベーストは「根拠に基づいた」というような意味で、その職場ではエビデンスがないとなにも動かない。逆に言うとエビデンスがありさえすれば、なんでもすぐに動く。予算とか機器の購入といった書類にもエビデンスを添付し、ちょっとした発言にもエビデンスが要る。論理的ではあるのだけれど、朝から晩までエビデンスという言葉を耳にしていると、バカバカしくもなる。実際、いい加減な添付資料でもエビデンスだと言えば通るので、慣れてしまえば仕事は楽だった。

誰でもそうなのだと思うが、自分と似たようなことをしている人と働くのが、いちばんいい。価値観が似ているし、話していることが通じる。違う職種の人たちと一緒に働くのは、とても大変だ。持っている知識が似ていれば、どんなことでも説明するのはとても簡単だ。

グローバル化が進み、国の違い、文化の違い、宗教の違いなどがよく話されているが、そんな違いより職業の違いのほうが、ずっと大きい気がする。国が違い、文化が違い、宗教が違っても、同じような仕事をしている人とは簡単に話が通じる。国が同じで、文化が同じで、宗教が同じでも、仕事が違うと話は通じない。そう思えることは意外と多い。

knowledge3.indd 70 2017/04/07 21:09:49

私には、情報や情報技術を仕事にしてきた人との会話がいちばん楽しいし、その人たちとの食事がいちばんおいしい。そこに、国や文化や宗教の壁はない。

耳からの知識

塩谷智紗子の「読み聞かせの言葉」は、文字にして読むとわかりにくいのに、耳で聞くとよくわかる。不思議なものだ。

話す童話作家として有名だった久留島武彦は、何千もの幼稚園、小学校をめぐり、童話を読み聞かせた。子供の手に本を渡して読ませるよりも、大人が本を読み聞かせるほうが、わかりやすい。生き生きと内容が伝わる。

塩谷も久留島も、子供との語り合い、触れ合いを大事にする。ひとりで本を読んで得る知識より、誰かから聞いて得た知識のほうが、記憶に残る。目からの知識より、耳からの知識のほうが、心に響く。

そこにいない誰かに何かを伝えようとする時、人はその思いを文字にする。でも文字には、声も、身振りも、表情もない。文字にするなかで失われてしまったものを蘇らせる。それが読み聞かせなのだ。

知るとわかる

内山和也の『にほんご表現のページ』のなかに、『にほんごの質問』というコーナーがある。「『コンピューター』と『コンピュータ』はどちらが正しいのですか?」とか、「『メールをありがとう』は正しい表現です

knowledge3.indd 71　2017/04/07 21:09:49

か?」、「『世話になっている人』とは誰のことですか?」といった面白い質問が続く。

そのなかに、「『知ってる』と『分かってる』の違いは何ですか?」という質問がある。答えはとても長いのだが、最後に、

・「知って（い）る」＝あることがらを知識として保持した状態にある
・「わかって（い）る」＝あることがらの本質を理解した状態にある

と、うまくまとめてある。

十分な量の知識があると思っているのが「知っているつもり」。知識の内容を十分に理解していると思っているのが「わかっているつもり」。知識は、理解することによって、「知る」から「わかる」へと深まってゆく。そんな内山和也の説明には、説得力がある。

でも、あることがらについて知識を持っていれば「知っている」と言い、あることがらの本質を理解していれば「わかっている」とすれば、「知ってはいるけれど、わかってはいない」、言い換えれば「知識は持っているけれど、理解はしていない」なんていうことがまかり通ってしまう。私はやはり、理解してはじめて、知識を持っていると言ってほしい。理解もしていないのに、知識を持っているなど言ってほしくはない。

サーチと大学

かつての高等教育において「知識は力である」は好ましい表現だった。ブライアン・ギャルヴィン（Brian Galvin）が「知識は今はもう重要でない」と書いている。どんなに知識を持っていても、スマートフォンにはかなわない。知識が重要でないとしたら、高等教育においていったいなにが重要なのか。ギャルヴィンの

knowledge3.indd 72 2017/04/07 21:09:49

この素朴な疑問は、昔ながらのやり方を続ける教育に対する批判でもある。

ピーター・ブラッドウェル（Peter Bradwell）は２００９年に『エッジレス・ユニバーシティ『(Edgeless University)』を発表し、ギャルヴィンの疑問への答えとなる大学の未来像を示そうとした。エッジレス・ユニバーシティとは、周縁のない大学というような意味だ。

ブラッドウェルのエッジレス・ユニバーシティのアイデアは、ロバート・ラング（Robert Lang）が２００３年に出版した『エッジレス・シティ（Edgeless Cities)』から来ている。そしてラングのエッジレス・シティは、ジョエル・ガロー（Joel Garreau）が１９９１年に出版した『エッジ・シティ（edge city)』に対する反論だ。

ガローのエッジ・シティは、大都市郊外の住宅地にオフィスや文化施設、娯楽施設、公園といった都市機能を持った場所が出来上がったもの。都市ができ、郊外ができ、そこにモールができ、モールが発展してまるで都市のようになったと思えばいい。大都市とは別の「郊外にある周縁都市」とされ、人の動きや暮らし方を変えたと言われている。

ラングのエッジレス・シティは、今の現実が必ずしもエッジ・シティではないという。実際、大きな都市のまわりにあるオフィスはどこも孤立しており、公共交通機関やモールからは遠く離れ、歩いていくには大変不便な場所にある。インターネットの発達などにより、人が集まるところにオフィスを構える理由がなくなってしまった。物理的な場所の制約から解き放たれ、都市で働く必要がなくなった。そんなラングの考えはあまり支持されなかったが、現実はラングの言うとおりになっている。

ブラッドウェルのエッジレス・ユニバーシティは、ラングの考えを大学にあてはめたものだと思えばいい。大学の研究はもう大学の建物を必要としない。キャンパスも必要ない。大学の枠も必要ないかもしれない。

knowledge3.indd 73　2017/04/07 21:09:49

ブラッドウェルは、グーグル（Google）などのサーチが発達するなかでの大学の役割について、そして可能性について語り、未来像を示している。

サーチの発達は、より多くの人々に膨大な情報を与えることを可能にする。同時にそれは、知識の府としての大学の役割を損なう。大学は今や、アイデアと知識とイノベーションの大きなうねりのなかで、ただの場所と建物でしかなくなってしまった。この変化は大学が今まで担ってきた役割を脅かす。しかし考えようによっては、この変化は教育や研究にとっての大きなチャンスと捉えることもできる。

この変化の後にくる新しい世界で、高等教育のためのインフラストラクチャを構築することを考える時には、すでに存在している教育機関のニーズに合わせて構築してはならない。エッジレス大学の可能性を追求するために、テクノロジーは戦略的資産としてもっと真剣に考えられる必要がある。テクノロジーを大学が将来的に教育や研究をサポートするためのソリューション・ツールとして活用し、変化のための推進役としなければならない。そういうブラッドウェルの未来像は、不思議なくらい明るい。

テクノロジーに飲み込まれるか、テクノロジーを活用していくか、それは大学の姿勢にかかっている。ブラッドウェルはそう言って大学を元気づけている。

マイケル・ウェスチ（Michael Wesch）は、「知識を、多くの人々に、より見えるようにする」ことが大学教育に関わる人たちの役割のひとつだという。「そのためには、コラボラティブ・テクノロジー（collaborative technology）が必要だ」というのだが、難しく考えることはない。電話だって立派なコラボラティブ・テクノロジーだし、チャットやビデオ通話のような今ではあたりまえになってしまった便利な道具の数々もコラボラティブ・テクノロジーなのだ。

学ぶ人を知識のある人に繋ぎ、ウェブ上に「知識の『もと』になる情報」に繋ぐ。その手助けをする技術

knowledge3.indd 74 2017/04/07 21:09:49

がコラボラティブ・テクノロジーだと考えればいい。

もうキャンパスとか校舎とか教室とかは要らない。それは説得力のある言葉だけれど、世の中はそう簡単には変わらない。日本は特に変わりにくく、いつまでたってもファックスを使い続け、マイナンバーになっても住民票はなくならない国だから、学校がなくなることはないだろう。世界中から権威がなくなっても、日本からは権威はなくならない。そう思ってみたものの、なくなるものはなくなると考えたほうが理に適っている。

未来のことは誰にもわからない。

知識と日本の大学

佐々木紀彦は、在学中に何百冊もの本を読むアメリカの大学生と何十冊しか読まない日本の大学生とを比べ、「日米の学生の差を生んでいるのは、インプット量、読書量の差」だという。そして、インプット量が知力の差につながるという。ある程度知識を整理し表現する能力があれば、読書量と経験が知力の差を生むというのだ。

実際、日本の大学生の4割以上が読書をまったくしないという。はじめの2年をアルバイトなどの社会勉強に費やし、あとの2年を会社訪問や就職試験などに費やしているのだから、知力などつくわけがない。あちらこちらに書かれているとおり、電車内で読書している学生は少なく、みんなスマホの画面をのぞいている。学生たちが欲しいのは知識ではなく、友達とのつながりであり、社会とのつながりであり、今日のためのカネであり、どうでもいいゲームでの勝ちや多くのポイントなのだ。

knowledge3.indd 75　2017/04/07 21:09:49

大学が、知識とは縁遠いところになってしまっている。ある大学教授が市民講座で教える機会を持ち、受講者の熱心さに驚いていた。大学よりずっとレベルが高いという。

アメリカでも読書の量は減っている。大学生の読書量も下降が続く。でもアメリカの大学生たちは、インターネットに読書と同じ役割を求め、知識への欲求はむしろ増しているというケース・ウェスタン・リザーブ大学の報告もある。

求められるのは、読書の量を増やすことではなく、テクノロジーを活用することではないか。知識の探求を学生に任せるのではなく、大学が知識システム（knowledge system）を用意し、学生に提供すべきなのではないか。知識システムは学生ひとりひとりが買えるようなものではない。学生の多くは、その存在すら知らない。知識システムで学生たちを知識に誘導するのは大学の務めではないだろうか。

現実はしかし、旧態依然という感じをぬぐえないでいる。放送大学の宣伝のためのポスターに「知識という翼を。」と書いてある。「知識は翼だ。新しい世界へ飛び立つ勇気も、自由に飛び回る自信も、その翼が与えてくれる」という文章からは、知識への疑問は一切感じられない。ポスターには「さあ翼を手に入れて、今の自分を飛び越えてゆこう」という文章もあり、「放送大学で与えられる知識を持ちさえすれば、明るい明日を手に入れることができる」という印象を与えている。今までの教育を続けることへの疑問は、微塵もない。「知識を増やすことが、明るい明日につながるのか？」という疑問への答えは、どこにもない。しかも、キャンパスに来ない学生に、どうやってテクノロジーを活用して知識に誘導できるのかという考えもない。

先見性がないと、一生懸命やればやるほど時代から取り残されていく。多くの日本の大学に欠けているのは、今起きている変化への危機感ではないか。将来自分たちが必要とされなくなるかもしれないというイマジネーションを持たなければ、生き残ることはできない。

knowledge3.indd 76 2017/04/07 21:09:50

知識のありか

内田樹は「知識があるということの価値がこれほど下落した時代はかつてない」と書く。それは、「知識を得ることに手間暇がかからなくなったからだ」という。そして「ちょこちょこっと検索して、それを散りばめれば物知りに見える」ともいう。

内田は「しかし」と続ける。「それによって『知識のありかについての知識』が不要になったのかと言えば、それはどうも違うような気がする」というのだ。「『知識についての知識』を得るためのショートカットは存在しない」、「そういう大切なことはグーグルで検索しても誰も教えてくれない」という内田の言葉からは、「本当に知識がある」と「物知りに見える」というのは違うのだという感じが伝わってくる。

実は私は、内田ほどは、「知識のありかについての知識」や「知識についての知識」を大切とは思っていない。「内田のように考える力のある人には、そんな知識はいらない」とさえ思っている。情報があれば、それで十分。情報を持った人に、理解力や分析力があれば、知識にはたどり着くことができる。

それは「ちょこちょこっと検索する」のとは違う。学校で何年もかかって知識を得るのではなく、サーチ画面を前にして次から次へと知識を得ていく。学校で教えてもらうのではなく、自分から知識を探しに行く。知識を与えてもらうのではなく、自分で知識を得る。大切なのは、そういうプロアクティブな姿勢なのだ。

表現や発信は、知識を得ることとはまた別のこと。私は表現にも発信にもあまり興味がない。知識を持つことのほうが、ずっと楽しいことに思える。

ジェームズ・マディソン（James Madison）は「知識は永遠に無知を支配する」と書いた。「人に支配されたくなければ、知識が与える力で自らを武装しなければならない」という文章からは、「知識を持つことが、なによりも大切だ」というマディソンのメッセージが伝わってくる。

knowledge3.indd 77　2017/04/07 21:09:50

今から２００年前にアメリカの大統領だったマディソンが、今生きていたら、同じことを書いただろうか。「知識は永遠に無知を支配する」ではなく、「『自分で考える人』は永遠に『自分で考えない人』を支配する」と書いたのではないだろうか。「自分で考えることが、なによりも大切だ」ということを伝えようとしたのではないか。

なぜ知識はもういらないと思ったか

サーチをすればなんでも見つかる、原爆だって作ることができる。そういうことに目がくらみ、知識はもういらないと思ってしまった。でもそれは、知識を得る環境ができたということで、知識がいらなくなったわけではなかった。人工知能（ＡＩ）が出来たからといって、知能がいらなくなるわけではない。知能はより重要なものになる。それ以上に知性はなくてはならないものになる。

これからの社会では、ひとりひとりの知識がひとりひとりの暮らしを決めてゆく。情報の洪水のなかで溺れないためには、豊かな知識が必要になる。

情報が増えたからといって、知識が増えるわけではない。実際私たちのまわりにあるのは、情報が多すぎて知識が増えにくいという新しい状況だ。画面に反応するだけで考えない人たち。情報が多すぎて考える時間のなくなった人たち。そんな人たちが、情報のアリ地獄のなかで忙しくしている。みんなと同じことをしたい人たちが互いにすることを増やし、形式にとらわれた人たちが忙しいことに酔いしれる。

知識を増やすにはやはり、考えるしかない。考えないで知識だけ増やしても、意味はない。料理人が食材の知識を増やし、調理の知識を増やし、試験に受かったとしても、美味しい料理を作れなければ意味がない。

knowledge3.indd 78 2017/04/07 21:09:50

知識は増やせばいいわけではないのだ。目的を持った人が、目的のために知識を増やす時、知識は裏切らない。けれど目的を見失ってしまえば、すべての知識は意味を失ってしまう。

目的がある時、知識が必要になる。目的はなんでもいい。「美味しい料理を作る」、「ビジネスを成功させる」、「あの人と仲良くなる」、「被災者を助ける」、「そのことについてもっと知る」というような目的は人それぞれだ。ただどんな目的でも、それを達成しようと思えば知識がいる。そしてその知識は、すべてひとりひとりの頭のなかにある。

サーチで見つかった情報は、知識ではない。見つかった情報を知識にできる能力は、そう簡単に培うことはできない。そう考えるとき、培った知識がとてもいとしく思える。

knowledge3.indd 79 2017/04/07 21:09:50

2・2　知識がなくては生きていけない

アリストテレス（Aristotle）は「すべての人は生まれながらに、知ることを望む」と言った。色、形、音、匂い、味、手触りといった五感で得たことをなんとかしてわかろうとし、知ろうとする。自分が役に立っているかとか、愛されているというような、わかるはずのないことまで、どうにかして知ろうとする。

役に立つことや知りたいことだけではない。役に立たないことや、自分と関係のないことまでをも知ろうとする。なんの役にも立たないことが意外と面白かったり、自分とは関係のないことにのめり込んで止められなくなったというようなことは、誰にでもある。私たちは好奇心でいっぱいの動物だ。そして好奇心こそが、知識の源なのだ。

役立つ知識

カール・マルクス（Karl Marx）は、あまりにも多くの役立つものを作れば、あまりにも多くの役立たない人ばかりになると言ったけれど、知識はどうだろう。あまりにも多くの役立つ知識は、私たちにどんな影響を与えるのだろう。無駄な知識、間違っている知識、悪い知識。それらは本当に役立たないのだろうか。

役立つ知識といってまず思いつくのが、カネになる知識だろう。知識を得て教壇に立ち、そこで知識の切り売りをすれば、確かにカネになる。もっとストレートなやり方もある。カネ儲けの知識を得て、実地で

knowledge3.indd 80 2017/04/07 21:09:50

カネ儲けをすれば、間違いなく儲かる。でも役立つというのは、カネのことばかりではない。

ロバート・ノージック（Robert Nozick）は「私はなに？」という文章を書いている。「私は誰？」ではなく、「私はなに？」だ。私とは、どんな存在なのか。私という言葉は、なにを指すのか。「自分のことは自分が一番よく知っている」というけれど、それは本当だろうか。自分という意識は確かにあるけれど、自分はいつも問題の種だし、困惑のもとだ。自分を持てあましている人は少なくない。自分という意識のことや、自分ということについて、ちゃんとした説明がいるのではないか。そんなことを言う人は多い。

ノージックはしかし、「自分とはなにか」という疑問に対しては、論理的な説明はあまり役に立たないという。たとえ論理的な知識を十分に持ったとしても、「どうやって生きなければならないのか」という問題は解決できない。どうやって生きてゆくか、どのような人になりたいかということを考えている人に、目の前に広がる可能性の範囲と限界を示し、選択の助けになるような知識。希望や勇気を与えるような知識。そういう一見論理的でないように見える知識が、実は役立つのだ。

役立つ知識を蓄えようと思っても、そんな知識はあまり役立たない。「役立つかどうか」「必要かどうか」などということは考えずに身に付いた知識のほうが、ずっと役立つ。思うようにはいかないものだ。

無駄な知識

吉川政瑛と中島孝志が、一見無駄に見えることが実は大事なのだと書いている。休憩をなくせば生産量は増えるように思えるが、実際には能率が悪化し、生産量が減ってしまう。休憩は、実は無駄ではないのだ。

無駄を取り除いていったら、大事なものがすべてなくなってしまったということはよくある。無駄を省く

knowledge3.indd 81　2017/04/07 21:09:50

ことばかり考えていると、なにもうまくいかなくなる。無駄と思われることが、実は大事だったりする。

知識も同じ。役に立つ知識やカネになる知識は、意外に役に立たないし、カネにもならない。そもそも役に立つ知識とかカネになる知識には、つまらないものが多い。だいいちワクワクしてこない。興味をそそられる知識や面白い知識に、かなうはずがない。

成瀬拓郎という「ゼンマイ式時計」を作っている人が書いた無駄についての文章がすばらしい。江戸時代の時計を解体すると「よくぞ、ここまで丁寧に・・・」と呆れるほど無駄が多いのだという。時を刻むという機能をしっかりと満たした上で、目に触れない内部の部品にまで繊細な装飾を施した美しい時計は、修理のことまできちんと考えて設計されているという。モノづくりに誇りと、愛情と、奥ゆかしさとを持っていれば、自然と無駄は多くなるという。

生活が豊かになった現代に「早く安く」をモットーに作られる時計には、無駄がまったくない。修理をしないことを前提に作られているから、壊れれば使い捨て。それがいいと言う人もいるが、温かみはない。

私たちは毎日、時間に縛られて暮らしている。そのなかではスピードが大事で、結果ばかりが重視される。成瀬はそんな時代にあえて逆行し、より多くの時間をかけ、ワクワクするような無駄を追及している。なんて素晴らしいことだろう。

悪い情報という知識

エンセオーグというサイトで取りあげられている幻覚性植物や化学物質の多くは、日本を含むほとんどの国において、その所持、使用、譲渡・販売、栽培・製造が法律で禁止されている。違反すれば当然、厳しく

knowledge3.indd 82 2017/04/07 21:09:50

罰せられる。国によっては、持っているだけで極刑が下される。

それなのに、そういうサイトが、禁止されもせず存在する。自己正当化の文章がすごい。「法律で禁止されているにもかかわらず、世界中で数千万もの人々が違法な薬物を使用した経験があるそうです。もしそれらを手に入れるために行動をおこせば、意外と簡単にみつけることができるでしょう。その事実をふまえ、当サイトは、違法な薬物を不用意に用いることによって起きる事故を避け、薬物使用の体験をポジティブなものにするために役立つ知識を提供しています」と書いてある。

原子爆弾の作り方が書いてあるサイト。ハッキングのやり方が書いてあるサイト。なんでもありだ。インターネットが悪いのではない。インターネット上にあるものは、すべて社会の縮図でしかない。

そうは言っても、悪い情報との付き合い方には最新の注意がいる。

嘘という知識

ブルックス・ジャクソン（Brooks Jackson）、キャスリーン・ホール・ジェイミソン（Kathleen Hall Jamieson）が、引用句（quotes）の氾濫について書いている。インターネット上に有名人が書いたり言ったりしたとされる名言を載せる人が、その人が本当にそう書いたかどうか言ったかどうかを確かめることはあまりない。

どこかの誰かが「その人がこう言った」という情報をインターネット上に載せれば、本当にそう言ったことになってしまう。そしてその情報は、瞬く間に広まる。

本にそう書いたのか、講演でそう言ったのか、それとも誰かにそう話したのか。それすらもわからない

knowledge3.indd 83　2017/04/07 21:09:50

引用句は多い。そして、出所のわからない引用句のほとんどは、偽の引用句なのだ。

世の中には何万円もする引用句の辞典というものがある。面白いけれど、表面的な引用ばかりなので、あまり役に立たない。コンテクストがわからないまま文章の一部だけが引用されてしまえば、意味は自ずと違ってくる。

それだけではない。なにもわからない人たちが編集すれば、内容は間違いだらけ。引用句が好きな人は多いけれど、その人たちのなかで元の文を読もうとする人はあまりいない。

インターネット上では忙しい人たちが「いいね」のボタンを押しながらコピー・ペーストを繰り返す。そして、元の意味は消えていく。

切り取った文章の意味が、もとの意味と違っても、切り取ったものが素晴らしければいいではないか。そんなことを言う人がいる。でもそれは、書いた人への冒涜でしかない。間違いなくそれは、悪いことだ。

でも私はそれを承知の上で、文章を引用し、コピー・ペーストをしたり、時には原文を見ながら長い文章をタイプしたりして、冒涜を続ける。移動の多い生活を続け、本棚に本を並べることもなく暮らしてきた私には、読んだ時の気持ちを覚えているためには、文章の一部を切り取って保存しておくしか方法がない。

幸いなことにサーチが発達し、インデックスなどのメタデータを付けないでいても保存した文章はたやすく見つかる。私は悪いことをしている自覚なしに、文章の一部を蓄え続ける。新しい情報環境はこういうものなのだと自分に言い聞かせながら、何万もの言葉を見えないディスクの上に紡ぐ。

私は嘘もつく。「嘘をつくのが悪いことだと知りながら、嘘をつく」というのとは少し違う。ポスト・トゥルース（post-truth）の世界の一員として、嘘をつく。というか、政治家でもない私も、嘘をつかざるを得ない。

私はグーグル・サーチを使っている。グーグル・サーチは、私が以前にサーチしたことを覚えている。

knowledge3.indd 84 2017/04/07 21:09:50

私がどこにいるかも知っている。そして、私が欲しいリンクを返してくれる。

グーグル・サーチで「拷問（torture）」という入力をする。もし私が人権擁護の活動をしていれば、政治的拷問のリンクばかりが画面上に並ぶ。もし私がポルノ・サイトばかり見ていれば、性的拷問のリンクばかりが画面上に並ぶ。

憲法改正に賛成のサイトを見たあとで、憲法改正についてサーチすると、賛成のサイトへのリンクが並ぶ。反対のサイトをよく見る人がサーチをすれば、反対のサイトへのリンクが並ぶ。するとサーチをした人は、同じように考えている人がこんなにもいたのかと意を強くし、自分の意見に確信を持つ。

イーライ・パリサー（Eli Pariser）はこれを、フィルター・バブル（filter bubble）と名付けた。サーチを繰り返すうちに私たちは、自分で作り出した膜のなかで、自分の考えが正しいと思うようになっていく。

フェイスブック（Facebook）も基本的には同じだが、フィルター・バブルに限ればその効果はグーグル・サーチよりも大きい。フェイスブックの創始者で現在ＣＥＯに就いているマーク・ザッカーバーグ（Mark Zuckerberg）は「フェイスブックはユーザーをどこかに閉じ込めたりはしない」と言っているが、そのアルゴリズムは間違いなくフィルター・バブルを作り出している。

フェイスブックのニュース・フィードは、ニュースのすべてが表示されるわけではなく、ユーザーが以前に「いいね！」といったものに似た内容のものだけが表示されるよう設計されている。だから例えば、イギリスの欧州連合離脱是非を問う国民投票のキャンペーン期間中には、離脱を支持する人たちは「離脱したほうがいい」というニュースばかりを目にすることになり、残留を支持する人たちは「残留したほうがいい」というニュースばかりを目にすることになる。そんななかでは誰もが、自分の意見により強い自信を持つようになる。

knowledge3.indd 85　2017/04/07 21:09:50

アマゾンは「あなたにおすすめ」と言って、何冊かの本の宣伝をインターネット上に表示する。アマゾンのアルゴリズムによって選ばれた本は、どれも私の興味を引く。

そんな環境にいて、フィルター・バブルに閉じ込められたくないとか、好みを知られたくないと思えば、もう嘘をつくしかない。そう思って私は、今日もインターネット上で嘘をつく。

正しい知識

エリ・ブレーク（Eli Blake）は、「公正な世界では、生徒たちは、ＤＮＡ構造の発見者はロザリンド・フランクリン（Rosalind Franklin）だと学ぶだろう」と言った。そして「世界が公正であることは稀だ」と付け加えた。

私たちは「ＤＮＡの構造は、ジェームズ・ワトソン（James Watson）とフランシス・クリック（Francis Crick）が発見した」と教えられる。フランクリンが発見したとは教えられない。そして教えられたことを無条件に信じる。

「楠木正成が英雄だ」と教えられればそれを信じ、悪党だったとは思わない。「天皇が神だ」と教えられれば、天皇が人間だという想像すらできなくなる。「民主主義や人権は普遍的な価値だ」と教えられれば、それが間違っているなどとは露ほどにも思わない。教育で詰め込まれる「中央官庁公認の『正しい』知識」ほど、厄介なものはない。

所詮人間が考えていること、言っていること、書いていることだ。絶対に正しいなどということは、ある筈がない。

knowledge3.indd 86 2017/04/07 21:09:50

間違っている知識

どうやって生きたらいいのかというような知識は、それを待っている人には役に立つし、そうでない人には役に立たない。それと同じように、自分が好きだからといってみんなが好きだと思うのは間違っている。自分が好きなものを好きな人は、意外と少ない。

石牟礼道子の「あした、あさりご飯をつくろうとおもえば今日、あさりを採りにゆく。すると、あさりだけでなく、アオサも巻貝の類もはまぐりも潮吹き貝もぶう貝も、ひじきまでも採ってくる。欲ばって採ってくるのではなしに、採って帰らぬと、海の中の貝の人口がふえてふえて、うじゃうじゃになりはせぬかとおもうくらいに、もうそこらじゅうにいるのだったから。海に降りる山道のついでにつわ蕗もわらびも山椒も採れた。山道伝いに、一日海に下れば、ゆうに一週間分は、多彩に食べわけられるしゅんの海山のものを、背負いながら帰っていた」という文章を読んだだけで幸せになるのは、私ぐらいかもしれない。

井上靖が「幸福は求めない方がいい」と書いたとき、「そう、その通りだ」と思う読者は少ないかもしれない。「夢中になるのが一番いい」という文章を読んでも、「井上靖は、恵まれているな」というような感想しか持たない人は多い。そして、「あまり自分を不幸にしてはいけない」、「努力する人は希望を語り、怠ける人は不満を語る」、「生きているということに多少の意義がないと、生きていけない」、「何とたくさんのすばらしい、一生に一度の出会いがあることか」などという素晴らしい言葉の連なりも、多くの人にとって何の意味も持たない。

りりィがあの声で、「空もひとり、海もひとり、私もひとり、でも、空は雲に海は波に話しかけて、楽しそうに笑いながら生きているのに、なぜ私ひとり、心に涙ためて、さみしさにたえながら、生きていくのか」と歌えば、私はそれだけで幸せだった。47年たって、もう誰も覚えていなくても、私はその歌をずっと覚え

knowledge3.indd 87　2017/04/07 21:09:50

ている。

私は石牟礼道子が好きで、井上靖が好きで、りりィが好きだ。そういう人たちの言葉がみんな好きだ。でもだからといって、そんな言葉が、みんなにとって素晴らしいとは、露ほども思ってはいない。

かつて、まだ理不尽なことが多くまかり通っていたころに、石牟礼道子のように感じる人がたくさんいた。井上靖のように考える人がたくさんいた。でもそんな人たちは、もうみんなどこかに行ってしまった。混とんとしたものが消え、世の中がきちんとしてきたら、りりィの歌声は響かなくなった。そしてりりィは死んでしまった。

だから今、私が素晴らしいと思うことを口にしても、それはせんないことでしかない。私の思いも、考えも、そして好きだと思っていることも、要するに私の知識の全部が間違っているのだ。

国際伝統的知識研究所（International Traditional Knowledge Institute (ITKI)）というところが誇る知識も、同じように間違っている。伝統的なやり方を守るということは、役に立たなくなったものにしがみつくこと。前を見ずに後ろばかり見ていては、時の流れに後れを取るだけなのだ。

日本の組織では、法律に代表される後ろを見る学問を勉強した人が力を握っている。自然とどの組織も、前例を大事にし、前を見ることをしない。過去の繁栄にしがみつき、後戻りをしようとする。前を見て以前とは違う繁栄を夢見なければいけないのに、後ろを見て以前と同じ繁栄を取り戻そうとする。時は流れていくということは誰でも知っているし、時は戻らないということも誰でも知っている。それなのにみんなで、過去を見ている。

ではみんなで先に進めばいいかいうと、決してそんな単純なことではない。羽生善治がその辺のことを上手に書いている。少し引用すると今まであるような知識の積み重ねとか環境の良さっていうことだけ考えて

knowledge3.indd 88 2017/04/07 21:09:50

いたのでは、突き抜けるのは難しい」「もっと全然違うことをやらなきゃいけない」という至極当然のことなのだが、羽生らしいのは「絶対プラスになるとか、はっきり数値化できるとかいうものではなく、役に立つかどうかわからないことをやるのが大事だ」というところだ。なにごとも計算通りにはいかない。成功とは結果なのだ。

前を見ていたからといって成功するとは限らない。でも後ろばかりを見ていれば必ず失敗する。

間違った知識は、決して間違ってはいない。時が変わり正しい知識になることもあるし、場所を移せば歓迎されることもある。持っている知識が役に立つかとか、間違ってはいないかなどと考える必要はない。知識は知識。興味を持ったものが知識になれば、それでいい。

こうあるべきという知識

共同通信社が出している『記者ハンドブック』には、用字用語集、新聞漢字・仮名遣い、書き方の基本、記事のフォーム、新聞略語集などが収録されている。原稿を書いているときに出くわす戸惑いを、簡単に解消してくれる。「2桁の数字は連数字とする。1万以上の数字には万、億、兆などの単位語を付ける。単位語の十、百、千は原則として使わない。千はきりのいい数字に限り使う。ただし運動、経済などの分野で定着した表記は原則に従う」などなど、こうですよと決めてくれる。

ただ世の中には、決めてくれて嬉しい人と、決められると怒り出す人がいて、とにかくこのハンドブックを使えばいいというものではない。

例えば澁澤龍彦は、こういう規則にかなりイライラしていたようで、「近ごろの校正者の通弊として、私

knowledge3.indd 89　2017/04/07 21:09:50

がもっとも困ったものだと思うのは、やたらに字句の統一ということを気にする点である。これは画一的な学校教育や受験勉強の影響ではないか、などと考えてしまうほどだ。「生む」と書こうが「産む」と書こうが、どっちでもいいのである。その場合に応じて、両方を使い分けても一向に差支えないのである」と書いている。

石牟礼道子の文章を読んでいると、ひとつの話のなかに「あたし」と「私」が出てくる。もし構成をする人が『記者ハンドブック』に従って字句を統一していたら、あの味のある文章はきっと、のっぺらとしたつまらない文章になってしまっただろう。

字句を統一するのはただしい。字句を統一しないのは間違っている。そういうことになっている。けれどそんなことを無視することで、伝わってくるものもある。

間違っているのは、そう悪くはない。間違った知識も、そう悪くはない。

いらない知識

ヴィニ（vini）が、どうしたら靴でワインのボトルを開けられるかということを書いている。それを頭に入れ、知識と呼ぶこともできる。でもそれが、なんだというのだろう。

ただの知識はなんの役にも立たない　どのように知識を得るのか。どのように知識を使うのか。そんな「ハウ・ツーもの」のような考えは、知識には似合わない。

試験のための知識など、たかが知れている。

ひけらかすための知識など、いらない。

knowledge3.indd 90 2017/04/07 21:09:50

本当の知識

アーネスト・ソーサ（Ernest Sosa）が「なにかを本当に知るというのは、どういうことなのだろう」という素朴な質問をする。日常生活のなかでは、そんなことはあまり考えない。ほとんどの人が「公正な判断」とか「常識」とかを頼りに知識を構築していく。本当の知識がなんなのかをはっきりと定義するというのは、簡単そうでいて結構難しい。哲学者たちはソクラテスの頃からその扱いにくい問題と格闘してきたけれど、これだという定義はどこにもない。

実際のところ、「本当の」と言ったときからすべてがぼやけてくる。本当の自分、本当の友達、本当の愛、本当の話。「本当の」と言えば言うほど本当から遠ざかる。

ソーサが意味する「本当に知る」を突き詰めても、なにもわかりはしない。知っていることを知っていると言い、知らないことは知らないと言う。それでいいのではないか。知っていることについてそれを知っていると言うとき、本当に知っているということになるのではないか。

そもそもなにかを本当に知るなどということが、なぜ問題になるのだろう。状況は時々刻々変わる。なにが本当かということも変わる。そんな変わり続けること、うつろいゆくことを、まるで普遍的なもののように扱うからわけがわからなくなるのだ。

永遠に変わらない知識など、どこにもない。

knowledge3.indd 91　2017/04/07 21:09:50

2・3　知識と経験・記憶・能力

経験に裏打ちされた知識というけれど、人はこの世で起こることのほとんどを経験できない。記憶と結びついた知識といっても、私などは、記憶と妄想の区別がつかないでいる。能力が知識の量と質を決めるとどこかに書いてあったけれど、それはどんな能力なのだろう。知識を軸にして経験、記憶、能力といったことについて少しだけ考えてみたい。

経験とは過ちのこと

オスカー・ワイルド（Oscar Wilde）は、「経験とは、誰もが自分の過ちに与える名前だ」と言った。なんといっても「この世界にはふたつの悲劇がある。ひとつは欲しいものを得られないこと、もう一つは欲しいものを得てしまうことだ」と言うような人だから、真意を推し量るのは難しいが、人が過ちから多くのことを学ぶのは確かなことだから、その言葉はそのまま受け取ってもいいのかもしれない。

いずれにしても、過ちから得た知識は貴重だ。過ちを犯したときには「大事なことを学んだ」「普通では得られない知識を得た」と考えるのがいい。

knowledge3.indd 92 2017/04/07 21:09:50

知識なんて、たかが知れている

ブライアン・ブロック（Brian Bloch）が、知識と経験について、面白いことを書いている。あなたは、「なんにも知らない人」、「少し知っている人」、「たくさん知っている人」の、どれでしょう。そんな質問を投げかける。

「少し知っている人」、例えば学校で学んだとか、本や新聞を読み込んで、なにかを知っていると思い込んでいるような人たちは、専門家の意見に影響されやすいのだという。表面的な知識は、実際にはなんの役にも立たない。

「たくさん知っている人」、例えばなにかについて教えていたり、書いたりしている人たちも、「やっている人」には敵わない。深い知識というものも、意外と役に立たない。

むしろ「なんにも知らない人」のほうが、生半可な知識がない分、判断を誤ることは少ないという。なにかしようとすると、知識は、役に立たないどころか、邪魔になることが多い。

もっとも「やっている人」にも弱みがあって、自分の領分以外のこととなると、まったく駄目なのだそうだ。なにも知らないからといって、遠慮したり口を閉ざしたりすることはない。「知っている人」も「やっている人」も、たいしたことはないのだ。人間のすることなんて、たかが知れている。

経験至上主義の人はどこにもいない

知識と経験のことを調べていると、なぜかイマニュエル・カント（Immanuel Kant）がよく出てくる。例えばカントは、「私たちの知識のすべてが経験に始まるのは間違いない」と書いている。「知識が経験に先行

knowledge3.indd 93　2017/04/07 21:09:50

することはなく、知識は経験に始まる」という部分を読めば、カントが経験至上主義の人のような気がする。でも実際は、知識のすべてが経験によるものではないということを説いている。経験至上主義とは反対の立場なのだ。

それはそうと、「人のなかには数学のような普遍的な知識がアプリオリに存在していて、しかもその知識は自然に適合している。だから数学は、経験に依らなくても正しい」というようなカントの論理には、どうしてもついて行けない。でもまあ、少し頭を冷やしてみれば、ついて行けないことも納得ができる。カントが『純粋理性批判（Kritik der reinen Vernunft）』を出版したのは、1781年なのだ。1781年といえば、神聖ローマ帝国ではヨーゼフ2世が農奴解放令を出し、フランスは革命の前夜。そんな時に論理について行けたら、そのほうがおかしい。

とにかくカントは経験至上主義の人ではない。カントの他によく出てくるのが、アルバート・アインシュタイン（Albert Einstein）。なぜか「知識の唯一の源は経験だ（The only source of knowledge is experience.）」という言葉が、一人歩きしている。その言葉のせいもあって、アインシュタインが経験至上主義だと思っている人は多い。

調べてみると、確かにそう言っている。でもその言葉は、「情報は知識とは違う。知識の唯一の源は経験だ（Information is not knowledge. The only source of knowledge is experience.）」という文章の一部で、「情報は知識ではない」ということを言いたいがために出てきた言葉だということがわかる。実際アインシュタインは「知識は、経験だけから湧いてきたりはしない（knowledge cannot spring from experience alone）」とも言っている。どう考えても、アインシュタインは経験至上主義の人ではない。

カントよりもずっと前の時代のフランシス・ベーコン（Francis Bacon）は「知識は力なり（Ipsa scientia

knowledge3.indd 94 2017/04/07 21:09:51

potestas est; Knowledge is power.)」と言ったことで度々知識の話のなかにでてくる。ベーコンの「知識は力なり」はもう古い。これからは「知識共有は力なり」だ。そんな論調を、どれだけ見たことだろう。

それはともかくとして、ベーコンは「最上の証明は経験だ（By far the best proof is experience.）」とも言っている。そんなベーコンのことを「経験主義（empiricism）の父」と言う人もいる。ではベーコンが経験至上主義の人かというと、必ずしもそうは言えなくて、ヴォルテールがベーコンのことを「科学的方法（scientific method）の父」と紹介していることからわかるように、ベーコンは経験よりも科学の人、知識の人という感じだ。

どこかに経験至上主義の人はいないか。

長谷川眞理子は「教育学者は経験至上主義を基本としており、人間は遺伝的生物的要素によって決定されるのではなく、経験によって決定される、だから教育に意味があるとする立場をとります」と書いている。「自然科学系の学問」と「人文社会系の学問」とがほとんど対話できない現状。脳神経科学や認知科学、遺伝学などで人間の理解が急速に進んでいるのに、それを認めようとしない教育学者たち。そんなこんなに対する長谷川のいらだちが、よく伝わってくる。

教育に意味があることは否定しない。ただ、教育者たちが持っている「教育で、なんとでもできる」という信念が、遺伝的基盤や生物学的性差といった学問的な事実をねじ曲げてしまうのを見ると、その教育者たちが言っている教育の基本、教育の意味について、改めて考えざるをえない。

世界のあちらこちらでは、宗教が邪魔をする。脳神経科学が脳の機能を説明し、認知科学、遺伝学、人間の理解が進んでも、宗教はそれを認めようとしない。幸いなことに、日本ではそういう宗教は強くない。でも残念なことに、宗教よりも手ごわいしがらみや、因習、陋習、悪習が社会を覆っている。古くからの学問

knowledge3.indd 95　2017/04/07 21:09:51

をする人たちは、自分たちが築いてきた構造に傷が付くことを恐れ、法律を守る人たちは、その法律を変えることになる事実から目を背ける。

教育至上主義とか、経験至上主義と言われてしまう教育者たちは、普通、熱意にあふれ、真剣だ。しかも自分たちのことを、教育至上主義の人とか、経験至上主義の人とは思っていない。進歩を阻害する人たちは、自分たちが進歩的だと思い、かたくなな人たちは、自分たちが柔軟だと思う。

人が集まって作る社会というものは、複雑だ。

知るとする

動物を本でしか知らない人が、動物園に行ってキリンやゾウを見た時に感じる驚き。海を見たことのない人が、はじめて海を見たときの感激。本で読んだり人から聞いたりして想像するのと、実際に見たり経験したりするのとでは、大きな違いがある。

自転車の乗り方の本を読んで自転車に乗ろうとしても、うまく乗れない。サッカーのドリブルの仕方を雑誌で見てドリブルをしても、うまくできない。「知る」と「する」のギャップは、ことのほか大きい。

そんなこともあって、「知識より経験」という人は多い。「百聞は一見にしかず」とか「習うより慣れろ」という諺があり、仕事場ではオン・ザ・ジョブ・トレーニング（OJT）が幅をきかせている。

それでも、と私は考えていた。経験はでは得られないこともあるのではないか。経験が役に立たないこともあるのではないか。

そうしたらある日、諏訪敦彦のスピーチのなかの「経験という牢屋」という言葉にめぐり会った。「仕事の現場の経験によって身につけた能力は、仕事の作法のようなものでしかない。その作法が有効に機能して

knowledge3.indd 96 2017/04/07 21:09:51

いるシステムにおいては能力を発揮するが、誰も経験したことがない事態に出会った時には何の役にも立たない」というのだ。クリエイションには、まだ誰も経験したことのない跳躍を必要とする。そしてその跳躍は、経験では得られない。

諏訪のスピーチを読んで、私のもやもやは晴れた。人がもう知っていることを知るのと、まだ誰も知らないことを知るのとでは、まったくと言っていいほど違う。人が既にしたことをするのと、まだ誰もしていないことをするのとでは、なにもかもが違う。

人が知っていることでも、自分で考えて知るのであれば、知らないことを知るのと同じ。人の言うことを鵜呑みにしたり疑いもなく信じたりして知るのとは、わけが違う。人がしたことでも、すべてを真似してするのと、自分なりに考えてするのとでは、違う。

人が知っていることをその通り知り、人がしたことをその通りする。そういう態度が必要なこともあるだろう。でもそれは、先生にとって都合のよい生徒の態度であり、師匠にとって都合のよい弟子の態度であり、コーチにとって都合のよい選手の態度でしかない。自分で考えて知り、自分で考えてすることを習慣にしない限り、先生を超える生徒にはなれず、師匠を超える弟子にはなれず、コーチを超える選手にはなれない。自分で考えなければ、誰も知らないことを知ることも、誰もしていないことをすることも、絶対にできない。

人間としての基本的な能力

ジョフ・コルヴィン（Geoff Colvin）は、「クリーブランド・クリニックは、医師と患者の共感訓練に重きを置くことで、患者の容態を改善し、医療費を低くすることに成功した」と書いている。また、「アメリカ

knowledge3.indd 97　2017/04/07 21:09:51

の陸軍は、人間の相互関係に焦点を置いた訓練を導入し、より強いチームを作り、実際の作戦で成功を収めた」とか「スタンフォード大学ビジネス・スクールでは、カリキュラムを見直し、人から人への体験を通して対人スキルを教えている」と書き、いろいろな組織が訓練や教育の見直しを行っている様子をうまく伝えている。

コルヴィンが並べた具体例に共通しているのが、人と人とのことだ。教育は「知識を教え込むこと」、そして訓練は「スキルを身に付けさせること」と考えてきた人たちが、人と人との関係に改めて目を向けている様子をうまく書いている。人と人とが同じことを経験したり、同じことを感じたり、同じ目標に持って行動したりということの重要性が、見直されている。

採用の基準が「なにを知っているか」から「どう問題を解決するか」に変わってきているのも、同じこと。知識よりも人間としての基本的な能力が問われるようになってきている。

知識は必要なときに持ってくればいい

アンソニー・コランジェロ（Anthony Colangelo）は、「知識はスキルや情報の集まりで、経験を通して得たものだ」と言った。そして、「インテリジェンスは、知識を応用する能力だ」と言った。

コランジェロによれば、「なにかについての特定の知識を欠いていても、インテリジェンスさえあればどんな問題も解決できる」ということになる。インテリジェンスがあれば、足りない知識を見つけ出すことなど簡単なことだという。

知識はすばらしいけれど、技能や技術が出てきては消えていくのと同じように、出てきては消えていく。

knowledge3.indd 98 2017/04/07 21:09:51

それに対し、知性は持続的・継続的だ。そう言うコランジェロにとって、知識は必要なときに持ってくるものでしかない。

経験と知識

道元の「身ノ初心ナルヲ顧ミルコトナカレ」という言葉が今に伝わっている。その言葉は「経験がないからとか知識がないからといって気後れすることはない」というようにも取れ、私たちの心をふるいたたせる。

経験がなく知識がない状態で「気後れすることはない」と言われても、なかなかそうはいかないけれど、生きていると、場面場面で、この道元の言葉がとても大きな励みになる。十分な経験と豊富な知識があるなどということは稀だから、怖気づいた時にはその言葉はありがたい。

それよりもなによりも、そもそも経験と知識は、そんなに「なくてはならないもの」なのだろうか。

そのことについて、こういち（Koichi）という人が、とてもいいことを書いている。

・学生時代、勉強をサボった経験は今でも役に立っているが、教科書で覚えた知識はほとんど役に立っていない。
・サラリーマン時代、飲んで喧嘩して涙した経験は役に立っているが、研修や会議での知識は全く役に立っていない。
・会社経営時代、取引先やお客様に頭を下げ続けた経験は役に立っているが、成功法則本などの知識は全然役に立っていない。

knowledge3.indd 99　2017/04/07 21:09:51

・動物には本来備わっている本能があり、そこに経験が重なり、やがて知恵となる。生物学的には下等動物に知恵はないとされているが、生きていること自体が知恵なのではないか。
・知恵がなければ、人間も動物も生きられない。

ある種の知識が役に立たないということを、これほどうまく書いた文章は他にない。

ベル・ベス・クーパー（Belle Beth Cooper）は「知識と経験の違いはなにか？」「脳は知識や経験をどう処理するのか？」「創造的思考のためには知識と経験のどちらがより重要か？」といった疑問を、写真や絵やイラストで表す。レンガが積み上げられた脇に「経験」と書いてあり、レンガが地面に散らばっている脇に「知識」と書いてある。ある意味、真髄をついている。

知識とか経験といったものをビジュアルに表す人は他にもたくさんいる。インターネット上には様々なイラストが出回っていて、とても面白い。

ロン・レトケマン（Ron Letkeman）のイラストでは、知識はバラバラの点、経験は点と点が線で繋がり、創造性は点と点が線で繋がって猫の形をしている。知識や経験を組み合わせるのが創造力というわけだ。

ヒュウ・マックレオッド（Hugh MacLeod）のイラストでは、バラバラの点は情報で、点と点とが線で繋がっているのは知識だ。

ビジュアルに表すことで説明するというやり方は、わかりやすい反面、単純化のなかに大事なことが消えてしまったり、白黒のつかないものまで白黒をつけてしまったりなど弊害も多い。「わかりやすい説明」を見たときには、注意が必要だ。

毛沢東は、「どのような知識も、経験から切り離すことはできない」と言った。「知識を持つことは必要だ

knowledge3.indd 100 2017/04/07 21:09:51

が、そのためには現実を変革する実践に参加しなければならない」、「梨の味を知りたければ、自分でそれを食べてみることだ」、「原子の組織と性質を知りたければ、物理や化学の実験をすることだ」というような文章からは、感覚や経験への強い思い入れが感じられる。

唯物論に固執し、観念的なものを否定すればするほど、自分自身が観念的になってしまうものだが、毛沢東も例外ではないようだ。「唯物論は正しい」、「抽象的でも科学的なら正しい」、「レーニンは正しい」というように、自分たちの考えを無条件に正しいとしたとき、それは既に宗教のような「イズム」であり、観念的だ。

毛沢東の「知識といわれているもののうち、こういうものは知識であり、こういうものは知識ではない」という言い方は、宗教の「真実といわれているもののうち、こういうものは真実であり、こういうものは真実ではない」という言い方と同じく、論理的におかしい。誰がなんと言おうと知識は知識なのであって、誰かに「それは知識ではない」などと言われる筋合いはない。

同じく毛沢東の「こういう知識は信頼できるが、そうでないものは信頼できない」という言い方も、宗教の「こういう言い伝えは信頼できるが、そうでないものは信頼できない」という言い方に似ている。熱狂のなかから出てくる「自分たちの考えだけが正しい」という思い込みは、知識をとても不自由なものにする。

横田尚哉は、知識と経験との違いを、お金と時間との違いに例えて、うまく説明している。

健康の回復、つまりけがや病気の治療の場面では、お金がその効力を発揮する。でも、持続的な健康、つまりけがや病気の予防には、時間が必要だという。

知識はお金で買うことができる。本を買えば知識が手に入るし、本を読んで知識を仕入れる余裕がなければ、専門家にお金を払えばいい。でも、経験は自分で時間をかけることでしか手に入らない。お金を積んでも人から経験を譲ってもらうことはできないし、借りることもできない。本を読んで人の経験を追体験する

knowledge3.indd 101 2017/04/07 21:09:51

ことは可能だが、追体験で入手しているのは経験ではなく知識だ。

横田の言っていることは、とてもよくわかる。でも、なんだか違うような気がする。

インターネットのおかげで、「知識を得るのに、お金はいらない」という環境が出来上がってしまった。そしてまた私たちのまわりには、「いろいろな経験を積もうとすれば、お金がいる」という現実が出来上がりつつある。どこかに行くのにもお金がいるし、なにかを体験するにもお金がいる。

ついでに言えば、「持続的な健康も、カネ次第」という医療が確立しつつある。

横田の言っていることが、過去のことになりつつある。

知識の理解

知識を専門とするエピステモロジスト（epistemologist）という人たちがいる。何百年ものあいだ、人はどうやってものを知るのかということを研究してきた。エピステモロジー（epistemology）は哲学のひとつの大事な分野だが、「経験に先立つ自明的な知識のことを『アプリオリな知識（a priori knowledge）』といい、経験を通じて得る知識のことを『アポステリオリな知識（a posteriori knowledge）』という」というようなことを話しているうちに、いつのまにか過去のことになってしまった感じがある。

19世紀の後半から20世紀にかけて、心理学や精神病理学が発達し、知識というものが科学的な手法で見直されるようになった。観察や実験によってさまざまなことが明らかになるにつれ、エピステモロジーは徐々に廃れ、知識というものの理解や解明も心理学者たちの手に委ねられるようになった。

現在は研究が進み、学際的な研究も盛んで、どんな研究も、哲学、医学、心理学、生物学などという今ま

knowledge3.indd 102 2017/04/07 21:09:51

での分野で括ることはできなくなっている。研究によっては2つ以上の専門分野のことに精通しなければできないものもあり、分野という考え方自体、もうあまり意味を持たない。それでも分野は強固に存在し、細分化されてゆく。認知科学（cognitive science）、神経学（neurology）、神経科学（neuroscience）、神経心理学（neuropsychology）、認知神経科学（cognitive neuroscience）、心理生物学（psychological biology）、神経生物学（neurobiology）、精神物理学・心理物理学（psychophysics）、脳科学（brain science）、脳神経外科学（neurosurgery）、精神医学（Psychiatry）といった分野の研究者たちが、それぞれ「知識」について研究し意見を持つ。コンピュータ科学（computer science）、情報科学（information science）、コンピュータ工学（computer engineering）、システム工学（systems engineering）などの分野で、人工知能（artificial intelligence（AI））やビッグ・データ（big data）の研究をする人たちも、実際的な必要に迫られて、「知識」をそれぞれに定義する。

そんななか、トーマス・ダベンポート（Thomas H. Davenport）とローレンス・プルサック（Lawrence Prusak）は、ビジネス環境での知識管理の専門家として、実用的な「知識」の定義を私たちに提供している。ある意味、無謀なことではあるが、ビジネスの現場からの「知識を管理したい」という切実な要請があることを考えれば、そんな定義も受け入れざるを得ない。

ダベンポートとプルサックは、「知識は、経験、価値観、情報、意見などが混ざり合ったものだ」という。新しい情報はまず評価され、必要であればそれまでの知識のなかに組み込まれる。新しい経験や新しい意見も、必要であればそれまでの知識のなかに組み込まれることになる。すべての体験が経験として知識に組み込まれるわけではないし、すべての意見が知識になるわけでもない。

データベースのなかのデータやリポジトリのなかの情報が、組織にとっての知識だと言う人がいる。でも

knowledge3.indd 103　2017/04/07 21:09:51

それは、大きな誤解だ。データや情報は、知識ではない。組織では日常業務のなかに、知識が埋もれている。業務のプロセスのなかに、ひとつひとつの仕事のなかに、道具や機械の使い方のなかに、そして規則や規範のなかに、知識が隠れている。

経験とは、「私たちが、なにをしてきたか」ということだけでなく、「私たちに、なにが起こったのか」ということも含む。そして「なにがうまく行ったか」、「なにがうまく行かなかったか」、「なにが良かったか」、「なにが悪かったか」というようなことが、すべて知識になってゆく。

知識はほとんどの場合、意識されずに蓄積されていく。ただそうはいっても、知識は、考える人のところにだけ訪れ、なにも考えない人のところには訪れない。データに目を向け、情報を能動的につかみ取りに行く人のところには、知識が集まる。知識を軽く見てはいけない。

ダベンポートとプルサックが書いている「知識」は、他の分野の研究者たちの「知識」とは違うものだが、会社や官庁のような組織のなかで「知識」を管理したり共有しようと努力したりしている人たちには、とても有難いものなのだ。他の分野の研究者たちがなにを言っても、ダベンポートとプルサックが彼らの定義を変えることはないだろう。

考えてみれば、ビジネスの研究者たちが「知識」とはなにかとか「知識」の定義はこれだとか論じるのは、なんだか変だ。「なにかが違う」という感じがつきまとう。

「知識の管理」や「知識の共有」がさらに発展してゆくのか、それとも他のビジネスの課題のように単なる流行で終わるのか。それは誰にもわからない。

knowledge3.indd 104 2017/04/07 21:09:51

見せる知識

ブルース・リー（Bruce Lee）の言葉の数々には、ブルース・リーらしさが漂っている。「私はすぐに判断するとか判断されるというために学ぶのではなく、理解するために学んでいる」とか、「私は盲目的に群衆に従うとか、そのアプローチを受け入れるとかいうことはしない」という言葉からは、ブルース・リーらしさがあふれ出してくる。

「私は自分自身に、通常の役割を割り振るということはしない。幸いにも私の自己認識は、そんなことを許さない」、「私は『人生とは生きることであって、概念化することではない』ということを理解するようになった」、「私は毎日成長しているし、正直なところ限界がどこにあるのか知らない」、「啓示とか新たな発見とかが、毎日あるといい」、「私は過去の不運の記憶を大切にしている。それは不屈の精神をさらに強くする」などという言葉はナルシシズムでいっぱいだが、不思議といやみはない。

自分をブルース・リーらしく見せるという目的のために知識を溜め込んだのならすごい俳優だし、そうでなくて自然にこんな知識を持つようになったのならすごい人だ。いずれにしても普通ではない。

「芸が熟していくと、型のない型が出来上がる。氷が水に溶けるように、型が消えていく。なんの型も持たないということは、すべての型を持つことと同じ。なんのスタイルも持たないということは、どんなスタイルにもフィットできるということだ」という言葉がある。ブルース・リーだけでなく、俳優が残す言葉には面白いものが多い。

knowledge3.indd 105　2017/04/07 21:09:51

知識と関係式

ニック・ミルトン（Nick Milton）は、データやデータ管理といった話のあと、

データ ＋ データ構造 ＋ 関連性 ＝ 情報

という関係式を示した。その関係式を説明したあとで情報や情報管理といった話をしたものだから、聞いている人たちはみんな「その通り」という肯定的な気分になってしまった。

そしてまた、

情報 ＋ 経験 ＋ 経験則／論理 ＝ 知識

という関係式を説明したあとで、知識、知識管理、行動、プロジェクト管理といった話しをした。関係式の持つ神通力のせいだと思うのだが、その話には不思議な説得力があった。どんなに否定的に思っていても、関係式で示されたりすると「その通り」と思ってしまうから不思議だ。

産業能率大学の『ＤＩＹ（Do It Yourself）アドバイザー通信教育テキスト第４分冊　ＤＩＹの方法』には、

知識 ＋ 経験 ＝ 知恵

という関係式で表される文章が載っている。ＤＩＹＡＤＮＹという人のサイトにそう書いてあった。とても

knowledge3.indd 106 2017/04/07 21:09:51

興味深いので、引用してみたい。

ＤＩＹで最も大切なことは「実際にやってみる」ということである。この実践のためにさまざまな知識が必要となり、学習しなければならないわけである。しかし知識がそのまま実践に役立つというわけではない。もともと知識と知恵とは異なったものであり、実践に役立つのは、知識よりむしろ知恵のほうであることが多い。知識とは「ある事柄について、いろいろと知ること。その知られた内容」であり、知恵とは「物事の筋道がわかり、適切に処理していくことができる能力。単なる知識以上のもの」と辞書にある。世の中には単なる知識として知っていれば十分な事柄が数知れずある。しかしまた、単なる知識として知っているだけではまるで意味がない、ということもある。実践に結びつかなくては意味がないという知識の類は、知恵に至って初めて生きたものとなる。そして、この知恵とは経験によって得ることができるものなのである。むしろ、経験なしに知恵を得ることはできないといったほうがいいだろう。しかし、やみくもに経験を積めばよいというわけではない。経験はともすると、人を狭く、頑迷にしてしまう。つまり、知識と知恵とは相補う関係にあるといえる。

ＤＩＹで「実践が大事」というのは、まさにその通り。大事なことなのだろう。このテキストはまた、知恵を「生物に全てに備わった能力」だとしている。生物としての人間が生きていくうちに自然と備わったものが、生活の知恵。折角手に入れた知恵なのだから、磨きをかけて、有効に使っていこう。知恵を働かせて、楽しく暮らそう。書いた人のそんなメッセージが伝わってくるテキストには、好感が持てた。

knowledge3.indd 107　2017/04/07 21:09:51

知識と記憶

知識について知ろうとすると、「知識はどこにあるのか？」とか「知識はどこに蓄えられるのか？」という疑問に行き当たる。世の中には「頭に入れた知識を、心で使う」とか「身体で知った知識を、心で感じ取る」という訳のわからないことを言って尊敬されている人もいて、その類のものをいくら読んでも、答えはでない。

もっとも「知識はどこにあるのか？」とか「知識はどこに蓄えられるのか？」という疑問には、ほとんどの人が「脳」と答える。脳ということならば医学の領域なので、医学者の研究結果を読めばいいではないか。知識が脳にあるというのなら、それは記憶だろうか。そしてそれは、「脳のどの部分のどの細胞が、記憶の処理にどういう働きをしているか」を知ればいいということなのか。そう思った私だが、すぐにそれは「そんなには単純なことではない」ということに気付かされた。ここではまず、記憶について考えてみよう。

長いあいだ記憶は、医学ではなく心理学の領域だった。そのため、記憶という言葉のまわりには、モデルとか、タイプとか、仮説とか、分類とかが、数多く渦巻いている。リチャード・アトキンソン（Richard Atkinson）とリチャード・シフリン（Richard Shiffrin）は、１９６８年に記憶モデルを発表し、記憶を、感覚記憶（sensory memory）、短期記憶（short-term memory）、長期記憶（long-term memory）の３つに分類した。３つの記憶はさらに細かく分類される。もちろん、そういった記憶が実際にあるわけではない。

感覚記憶は、視覚記憶（iconic memory）、聴覚記憶（echoic memory）、触覚記憶（haptic memory）などに分類される。見たものの記憶は1秒も持たない。言い換えれば、「視覚記憶は、1秒もしないうちに忘れられてしまう」ということになる。聞いたものの記憶や触ったものの記憶も、数秒しか持たない。見たもの、聞いたもの、触ったもののすべてをずっと覚えていたら脳はパンクしてしまうから、「感覚記憶が、数

knowledge3.indd 108 2017/04/07 21:09:51

秒もしないうちに忘れられてしまう」というのは理に適っている。いずれにしても、数秒で消えてしまう感覚記憶は、知識とは言えない。

短期記憶はあまり細分化されていないが、いろいろな説を唱える学者たちによって、似た概念に違う名前が付けられていて、まぎらわしいことこの上ない。プライマリー・メモリー（primary memory）、アクティブ・メモリー（active memory）、オペラント・メモリー（operant memory）プロビジョナル・メモリー（provisional memory）、ワーキング・メモリー（working memory）という具合だ。ワーキング・メモリーは、記憶そのものよりもプロセスに焦点が当てられ、短期記憶とは意味合いが違う。でもそのほかの概念は、ほぼ同じと考えていいようだ。短期記憶も15秒から数分程度しか持たない。だから短期記憶は、「知識のもと」だとは言えても、知識そのものとは言えない。

長期記憶は、手続き記憶（procedural memory (implicit memory)）と陳述記憶（declarative memory (explicit memory)）とに分類されている。陳述記憶はさらに細かく、エピソード記憶（episodic memory）と意味記憶（semantic memory）とに分類される。

手続き記憶はたとえば、泳ぎ方、自転車の乗り方、スキーの滑り方などについてのうまくいった記憶で、「一度覚えれば、その後ずっとできる」というのはみんな、手続き記憶だ。試行錯誤によって小脳のなかに、筋肉をうまく動かしたという記憶が生まれる。ジネディン・ジダン（Zinédine Zidane）は、コントロールという言葉をよく使う。「どの筋肉をどの程度動かせば、ボールをうまくコントロールできるか」は、同じ動作を繰り返すことによって覚えていくしかないようだ。筋肉の動きを細かく調整し、スムーズに動かす。私たちはその記憶のことを、知識とは呼ばない。

「モジログ」は、「知識とは何かを『知っている』こと」、「スキルとは何かを『つくれる』能力のこと」だ

knowledge3.indd 109　2017/04/07 21:09:51

という。知識は得るのは簡単だけれど忘れるのも早い。スキルは身につけるのは難しいけれど一度身につけたらずっと使えるという。「モジログ」の言うスキルはきっと、手続き記憶なのだろう。

エピソード記憶はその名の通り出来事の記憶で、時とか場所とか人とか物とかというような具体的なことに、その時どう思ったかということまで加わって出来上がる。意識して覚えていようとしないでも、自然に覚えてしまい、しかも忘れにくい。つまりエピソード記憶と言われているものは「個人的な経験と感情」の記憶なのだ。これは知識と深い関係を持つが、知識とは少し違う。知識と呼べないことはないが、やっぱり知識ではない。

意味記憶は言葉の意味についての記憶で、生まれて最初に覚える言葉に始まり、学校教育を含むありとあらゆる機会に吸収した言葉の数々の意味の集まりだ。私たちはそれを知識と呼び、大事なものだと思い込んでいる。ただ、日本語の花の名前や魚の名前が日本を出た途端に通用しなくなることからわかるように、場所が変わり時間が変われば知識の大半はなんの意味も持たなくなる。国語の漢字とか歴史の年号なども、そしてまた数学の公式や化学の分子式や組成式なども、その有用性は限定的だ。まあそんなことはともかく、意味記憶は知識なのだ。

感覚記憶は知識ではない。短期記憶も知識ではない。長期記憶のなかの手続き記憶は知識ではない。長期記憶のなかの陳述記憶のひとつであるエピソード記憶も知識ではない。

少し説明が長くなったが、長期記憶のなかの陳述記憶のひとつである意味記憶こそが、知識と言われているものの正体だということになる。

それにしても不思議なことばかりだ。五感で感じ取った感覚記憶のうちのほんの一部が脳に送られ、短期記憶になる。そして、そのまた一部が長期記憶になる。そのプロセスのなかで、どの記憶を残し、どの記憶

knowledge3.indd 110 2017/04/07 21:09:52

を消し去るかは、瞬時に決められる。脳はどのようにして判断を下すのか。

医学は、ニューロンやシナプスで説明するが、それは観察でしかなく、つまりビルのなかで起きていることを遠くから望遠鏡で覗いているのと同じで、「実際のところ、なかでなにが起きているのか」はわかっていないのではないか。「ニューロンという神経細胞のなかにある遺伝子情報が読み取られタンパク質が合成されると、長期記憶のメカニズムが働く」と言われても、「シナプスが一時的に強化されるのが短期記憶、恒久的に強化されるのが長期記憶だ」と言われても、所詮なんのことだかわからない。

知識が心理学的には、そして医学的にはどういうものなのか。それを知るには心理学や医学についての膨大な知識が必要になる。知識がなければ他の知識を持つことができない。そういう現実の前に、私は深く知ることを諦める。

人体は、なんて巧妙にできているのだろう。脳のほんの一部分の細胞が働くことで、一瞬にして「どんな記憶を残し、どんな記憶を捨てる」という判断を下す。そんなことは、私が持ちうる想像の範囲をはるかに超えている。そして残された記憶を、知識と呼ぶ。「知識は、はかない」という思いと、「知識は、いとおしい」という思いが、同時にやってきた。

ノウ・ホワイ、ノウ・ハウ、ノウ・ホワット

ラグー・ガルードゥ（Raghu Garud）は「知識は現象の理解を表すものだ」と言う。技術システムに限って言えば、システムの基になっている「原理」と、システムがどのように作られているかという「プロセス」と、そしてシステムがどのような役に立っているかという「利用のされかた」の3つのことを理解して、はじめて

knowledge3.indd 111　2017/04/07 21:09:52

知識といえる。そして「原理」「プロセス」「利用のされかた」が、それぞれ「ノウ・ホワイ（know-why）」「ノウ・ハウ（know-how）」「ノウ・ホワット（know-what）」に対応しているという。

知識といってもいろいろなタイプの知識があり、そのタイプによって獲得の仕方が異なる。ノウ・ホワイ、つまり「どうして」ということを知るには、学ぶのがいい。ノウ・ハウ、つまり「どうやって」ということが知りたければ、やってみるのが一番いい。そしてノウ・ホワット、つまり「なにか」ということは、使ってみればすぐわかる。ガルードゥのこういった説明は、知識といっても、いろいろな知識があるのだということを、改めて気付かせてくれる。

２００８年に封切られた『ベガスの恋に勝つルール（What Happens in Vegas）』というアメリカ映画は、キャメロン・ディアス（Cameron Diaz）とアシュトン・カッチャー（Ashton Kutcher）が演じる最低のカップルの、最高にくだらない話なのだが、なぜか気に入ってしまい、そのせいで、普通なら聞き流す台詞の数々を味わい尽くしてしまった。それで気がついたのだが、「ユー・ノウ・ホワイ！（you know why!）」「ユー・ノウ・ハウ・・・（you know how …）」、「ユー・ノウ・ホワット？（you know what?）」というふうに、ノウ・ホワイ、ノウ・ハウ、ノウ・ホワットがやたらと出てくる。

脚本を書いたダナ・フォックス（Dana Fox）が意識してそういう言葉を使ったのかどうかはわからないが、とにかく多い。もしかしたら、ただの口癖かも知れない。でももしかしたら、大いなる計算のもとで使われた言葉なのかも知れない。もし計算していたのなら、フォックスという人はすごい。

ところで先ほど「ノウ・ハウを知りたければ、やってみるのがいい」と書いたが、ノウ・ハウはそのほとんどが暗黙知で、知るのは大変に難しい。実践的な知識は、学ぶのが難しいだけでなく、伝えるのも難しいのだ。

knowledge3.indd 112 2017/04/07 21:09:52

偶景

薈田純一の写真展『書棚』は、面白かった。書斎の写真ではなく、書棚の写真が並んでいる。立花隆の書棚、司馬遼太郎の書棚、大宅壮一の書棚といった感じだ。

薈田は「書棚には、日常のなかでは忘れられている記憶が収められている」という。有名人の書棚が写った写真を前にして、人は誰も自分の記憶をよみがえらせている。他人の書棚をのぞき見るのは楽しいというけれど、人が写真のなかに見ているのはじつは、自分の書棚なのではないか。

忘れられている情報が詰まっている書棚は、ある意味死んでいる。立花隆が、司馬遼太郎が、そして大宅壮一が、その死んだ書棚のなかから情報を取り出し、それを紡ぎ、それぞれの作品を作り出していったかと思うと、感慨深い。

話しがそれるが、薈田は「突然よみがえる日常では忘れられた記憶」のことを「偶景」と言っている。偶景という言葉は、辞書にも載っていない。不思議に思っていたら、その言葉の由来が、志村正彦の『偶景web』というブログに書いてあった。なんと、ロラン・バルト（Roland Barthes）の『Incidents』を訳した沢崎浩平が、造った言葉だというのだ。

仏和辞典には「Incidents」の説明として「出来事、些細な支障、事故、偶発的事件、もめごと、トラブル、事変、紛争」などと書いてある。私のつたないフランス語の理解では、「Incidents」は、なにかしているときに起きる「どうでもいいこと」、そしてその「どうでもいいこと」が「大きな問題の引き金になってしまう」ということだ。いずれにしても「Incidents」の意味は、偶景という言葉から受ける感じとは、とても違う。

志村はブログに、「バルトによれば、『偶景（アンシダン）』とは『偶発的な小さな出来事、日常の些事』であり、『人生の絨毯の上に木の葉のように舞い落ちてくるもの』を描く『短い書きつけ、俳句、寸描、意味の戯れ』

knowledge3.indd 113　2017/04/07 21:09:52

のような類の文でもある」と書いている。これが沢崎の文章なのか志村自身の文章なのかは知るよしもないが、バルトが Incident を「短い書きつけ、俳句、寸描、意味の戯れ」のような類の文だと言ったとは思えない。Incident は、「偶発的な小さな出来事、日常の些事」であり、「人生の絨毯の上に木の葉のように舞い落ちてくるもの」ではあっても、それを描く文などではない。

それにしても偶景とは、なんていい言葉なのだろう。言葉の響きと言い、その言葉から浮かんでくる情景と言い、なんともいえず素晴らしい。沢崎浩平が造るまでそういう言葉がなかったのが、おかしいくらいだ。

偶作の「偶」の「たまたま」という感じや、偶感の「偶」の「ふと心に浮かんだ」という感じ、それに偶発の「偶」の「思いがけずに」という感じからイメージを膨らませていくと、偶景は「たまたま見る景観」であり、「ふと心に浮かぶ景色」であり、「思いがけずに目にする光景」ということになる。

「たまたま」「ふと」「思いがけずに」といった言葉からは、偶然なことや意外なことが浮かんでくる。そういったことは、予想通りのことやシナリオ通りのことばかりのなかにあっては異彩を放ち、また不安定さを醸し出し、魅力的でもある。

知識と能力

ジェームズ・フリン（James R. Flynn）は、個人個人の能力の差について、本や論文を書いてきた。私たちはただ親切でやさしいというだけではなく、寛大さと寛容さを兼ね備えた人のことを、「モラルのある人」という。また、ただひとつのスポーツではなく、いろいろなスポーツに秀でている人のことを「運動能力のある人」といい、ただひとつの楽器ではなく、いろいろな楽器を演奏できる人のことを「音楽のできる人」

knowledge3.indd 114 2017/04/07 21:09:52

という。そして、広範囲にわたる認識能力に優れていて、いろいろな仕事をうまくやり遂げる人のことを「一般的な能力のある人」という。

20世紀には、なぜかこの「一般的な能力のある人」のことだけが注目され、その能力は「知能指数（IQ）」という数値で示されるようになった。そしてフリンは、その平均値が、過去100年にわたって大幅に上昇してきているというのだ。これは世界的に見られる現象であり、どの検査方法でも知能指数の平均値は10年に3〜5ポイント上がっているという。1984年にフリンによって指摘されたこの現象は「フリン効果」と呼ばれ、さまざまな議論を巻き起こしてきた。

このフリンの考えとはまったく正反対の研究結果を示したのが、ジェラルド・クラブトリー（Gerald Crabtree）だ。彼が2012年に発表した論文は、専門家のあいだでは大きな議論を巻き起こし、遺伝子の研究とは関係のない私たちには大きな驚きを与えた。論文には「人間の知性は2千〜6千年前にピークを迎えており、その後人類の知的、感情的な能力は徐々に衰えている」という研究結果が書かれていたのだ。この論文はたくさんの反論と共に、あちらこちらで紹介されてきた。

クラブトリーは「私たちの脆弱な知性（Our fragile intellect）」という本を出版し、そのなかで、先史時代から今までの脳をめぐる変化について詳しく書くような研究者だ。いい加減なことを発表したわけではない。

私たちは「人は、進化し続けている」と思い込んできた。そしてまた、フリンの言うことは正しいと思い込んできた。だからクラブトリーの論文には、びっくりしてしまった。もっともクラブトリーの根拠も実は「脳の大きさ」だけで、論文は推論の域を出ていない。脳が大きければより進化しているというのであれば、シロナガスクジラは人より進化していることになる。果たしてそうなのだろうか。

knowledge3.indd 115　2017/04/07 21:09:52

じつは、「脳の大きさ」とか「脳の重さ」の研究はかなり前からされていて、さまざまな研究結果がいろいろな研究者によって示されてきた。ジョン・モーガン・オールマン（John Morgan Allman）の『進化する脳（Evolving Brains）』には、「脳の重さ」と「体の重さ」の関係が、とてもわかりやすいグラフで表されている。

グラフは両対数グラフで、横軸は「体の重さ」、縦軸は「脳の重さ」、グラフの上にはさまざまな動物が色の付いた点で表されている。赤い色の点は一般に類人猿とかサルとかいわれている動物の仲間たちで、青い点はその他の哺乳類の動物たち。赤い色の点は赤い「0・75」の線に沿って散らばっていて、青い色の点は青い「0・74」の線に沿って散らばっている。

グラフは、霊長類の動物たちの（体の重さに対する）脳の重さが、他の哺乳類の動物たちの（体の重さに対する）脳の重さより多い。このグラフから「霊長類の動物たちは、他の哺乳類の動物たちより優れている」と読み取る人もいる。

人間の脳はこの関係式から少しだけ重い側にずれている。つまり人間は、他の霊長類の動物たちに比べて、少しだけ重い脳を持っていることになる。だからこのグラフから「人間は、どの動物よりも優れている」と読み取る人がいても不思議ではない。

でも、そういうことは簡単には言えない。ネズミイルカ（porpoise）やイルカ（dolphin）の（体の重さに対する）脳の重さは、人間の（体の重さに対する）脳の重さとほぼ同じ。人間だけが特別だとは言えない。

人間のなかにも、体の重い人と軽い人、脳の重い人と軽い人がいる。だからといって、「あなたは体の重さに比べ脳が重いから、優秀だ」とか「あなたは体の重さに比べ脳が軽いから、優秀ではない」などとは言えない。事はそれほど単純ではない。

knowledge3.indd 116 2017/04/07 21:09:52

話を元に戻そう。クラブトリーの「人は狩猟採集社会の頃に進化が止まり、定住するようになってから知的にも感情的にも能力が落ちてきている」という話は、面白いし、それなりに説得力がある。クラブトリーに反論する人たちはデータを出せとか、調査方法に疑問があるとか、どこかで聞いたことのあることを言いつのるが、それは身も蓋もないというものだ。

クラブトリーの論文のなかの「遺伝子の変異で知能が低くなった人が自然淘汰されなくなった」という議論などは、現在の私たちの考えに真っ向から対立するもので、もしそれを言ったのが遺伝学者でなかったら大問題になっていただろう。それを承知で、人の知性の形成には数千の遺伝子が関係していること、私たちが暮らしている現在の安全な社会では命が脅かされるリスクが減ったこと、人の脳が大きくなっていないこと、人の知能が低くなっていることなどを論文として発表した勇気はたたえられてもいいのかもしれない。

フリンが言うように、私たちの知能指数が年々上がっているという事実をもって、私たちの知能は年々良くなっていると言えるのだろうか。それともクラブトリーが言うように、私たちの脳の大きさがホモ・サピエンスだったころからほとんど変わっていないという事実をもって、私たちの知的な能力は徐々に衰えていると言えるのだろうか。

フリンが「知能指数が年々上がっている」と言っても、知能テストで点数が伸びているのは、抽象推論や抽象思考を試すものだけ。現代に必要な能力が向上したからといって、一般的な能力が増したとは言えないだろう。

クラブトリーが言うように、私たちの脳は、毒蛇が目の前に出てくれば危険だと思い、テロを脅威と感じる。でも、クルマがすぐそばを走っていても危険とは思わず、環境問題を脅威と感じていないことからわかるように、私たちの脳は現代社会には適応できないでいる。

knowledge3.indd 117　2017/04/07 21:09:52

フリンが正しいのか、クラブトリーが正しいのか。結論を出すのは難しそうだが、私たちの脳が現代社会に適応できていないのを見ると、クラブトリーのほうが正しいように思えてくる。私たちの脳も体も、相変わらず何千年も前のまま。風呂場を危険な場所とは思わないし、必要もないのに脂肪を体内に蓄えようとする。私たちの脳や体が、私たちが作った社会に適応する日は、来るのだろうか。

知識の獲得

アンヌ・クリーマー（Anne Kreamer）が、知識の獲得について、とても大事なことを書いている。子供の頃に多くの人が身につける学習習慣が、大人になった時に知識の獲得の邪魔をするというのだ。書かれたことや言われたことを覚えるのが学習だとしたら、学習すればするほど創造とは縁遠くなってゆく。創造には自分で考えることが大事で、学習はその妨げになる。

新しいものを見て、それを新しい方法で新しい知識にし、それを今まで持っていた知識の体系のなかに位置づける。そんなことは学習を繰り返してもできはしない。自分で考える習慣のない人に創造はできない。

例えば『アリとキリギリス』の寓話のなかのアリを考えてほしい。夏には食料を蓄えるために働き続け、冬になれば蓄えた食糧で命を繋ぐ。そこには創造のかけらもない。キリギリスを助けようともしないことでわかるように、憐れみもない。もしその寓話のなかに教訓があるとすれば、「学習するだけで育ち、働くだけの大人になれば、知識は獲得できない」ということだろう。

クリーマーの考える知識というものは、努力をして獲得するもので、ぼんやりしていてもやってくるようなものではない。知識は欲しがっている人のところにしかやってこない。

knowledge3.indd 118 2017/04/07 21:09:52

与えられる知識

ダン・ヤッカリーノ（Dan Yaccarino）が絵本の重要性を説いている。私たちの多くが最初に手にする本は、ほとんどの場合、絵本だ。最初に読んだ絵本は、そのあとに何冊読んだとしても、いつまでも心のなかに残ってゆく。

もしかしたら私たちが覚えているのは絵本ではなく、一緒に読んでくれた人のことなのかもしれない。その人との温かい関係は、幼かった私たちの生活そのものだったはずだ。

知識よりも大切なものが間違いなくある。

ニック・ハーカウェイ（Nick Harkaway）が「大人が子供に知識を与える」ということについて多少の皮肉を込めて書いている。大人たちは「自分たちが知っていることを、子供たちには知ってほしくない」と思っている。言葉を変えれば「子供たちが知るべきことだけを知ってほしい」ということになる。

学校の先生たちは、「世界は良いものだと思ってさえいれば、良くなっていく」という大人たちと戦わなければならない。セックスについて教えようとすれば年令が低すぎると言われ、政治について教えれば偏ったことは言うなと注文が付き、宗教について教えれば馬鹿なことを言うと批判される。

もっとも教師も、教師に文句をつける大人たちも、子供の知識の獲得を思い通りにコントロールできているわけではない。教師が知識を与えれば与えるほど、従順な子供たちは受け身になり、自分で考えることを覚えなくなる。大人たちが知識の獲得を制限しようとすればするほど、子供たちは制限された知識を獲得してゆく。

セックスのことも、政治や宗教のことも、大人たちから教わるものではないのかもしれない。大人たちから与えられる知識ほど、つまらないものはない。

knowledge3.indd 119　2017/04/07 21:09:52

与える知識

セドリック・ヴィラニ（Cédric Villani）が、フランスの生徒の数学の成績が良くないことを例にあげて、フランスの教育システムを批判している。特に中学教育が悪いという。

ヴィラニによれば、社会のなかでの教師の役割を認め、教育の多くの部分を教師たちに委ねることが大事だという。教師たちの自主性・自律性なしに教育は成り立たない。教育が高度に中央集権化され、中央の官僚たちがなにを教えるかを決めるようになれば、教師たちは決められたことへの適応に追われ、教育どころではなくなってしまう。

しかも中央の官僚の言うことは、政権が変わる度に変わる。教育改革の名のもとに、教える内容までが変わり、教師たちは対応しきれない。ヴィラニはさらに、「教育というのは安定したものでなければならない」という基本的なことを思い出せと言う。

教育政策をコロコロと変え教育制度を複雑にするよりも、教育政策をいじらず教育制度を簡素化し、教育を教師の手に委ねるのが一番いいということだろう。

教育改革を行い、教育制度を複雑にしても、受け身の教師に教えられた受け身の生徒しか育たない。教育制度を簡素化することでしか、先を見通せる教師や、自分で考える習慣を持った生徒は出てこない。

knowledge3.indd 120 2017/04/07 21:09:52

2・4　見える知識、見えない知識

見える知識を形式知と呼ぶ。形式知は、文字や図などで表すことができ、人に伝えたりコンピュータで扱ったりしやすい。それに対し、見えない知識を暗黙知と呼ぶ。暗黙知は体で覚えたり身につけたりするもので、人に伝えるのもコンピュータで扱うのも今のところ難しい。組織で重要なのは、個人の持つ暗黙知を形式知に変換し、共有することだ。

コンサルタントがそんなことを「したり顔」で話す度に、私はそれを怪しいと思った。

膨らまない知識

２０１６年のはじめに、ズミツェル・バンダレンカ（Змітсер Бандарэнка）が、「ベラルーシで２０１６年に大きな変化があるだろう」と書いた。同じ頃、リゴール・アスタペーニャ（Рыгор Астапеня）は、「ベラルーシは大きく変化しつつある」と書いた。困ったことに、そのふたりが書いた文章を読んでも、そしてふたりの文章を理解できたとしても、私の知識は膨らんでいかない。

バンダレンカは、刑務所に入れられていた時にアムネスティ・インターナショナル（Amnesty International）が「良心の囚人」と呼んだ人。アスタペーニャは、オストロゴルスキー・センター（Цэнтр Астрагорскага）のディベロップメント・ディレクター。二人の「ベラルーシの現状」の説明は、当然ながら、

knowledge3.indd 121　2017/04/07 21:09:52

まったくと言っていいほど異なる。状況の認識も、説明の仕方も、とにかくなにからなにまで違う。

両方を読んでも、なにも理解できない。ベラルーシで実際になにが起きているのかは、なにも見えてこない。この二人が誰のために書いているのかも、よくわからない。二人のプロフィールを読んでも、何の役にも立たない。

背景を知らないと、知識は膨らんでいかない。

知識を膨らませようと思ったら、そのための知識が要る。それが知識というものなのだろう。

あたりまえのことを考え直す知識

川上浩司が「不便で良かったこと、ありません?」と問いかける。手間いらずで効率的に要求が満たせる便利な道具よりも、むしろ不便な道具を使うほうが嬉しいことがあるという。川上は『不便益システム研究所』という自分のサイトで、誰もがあたりまえだと思っていることに疑問を投げかける。

私は、川上の書くことにいちいち納得し、頷いた。実際私は、みんなが乗るオートマ車にではなく、マニュアル車に乗っている。オートマ車のほうがいいとわかっているのに、わざわざ手間のかかるマニュアル車を選んで運転しているのだ。クレジットカードで支払うよりも、なぜか現金で支払う。鉛筆をナイフで削る時間が好きで、そして削りカスをゴミ箱に捨てるのが好きで、電動の鉛筆削りを持っていない。電動歯ブラシも持っていない。電気シェーバーも持っていない。そんなわけだから、川上の言うことがとてもよくわかる。

私の場合は理屈ではない。変えることが面倒くさいだけなのかも知れない。でも川上は違う。便利を「手間がかからず、頭を使わなくても良いこと」とすると、不便は「手間がかかり、頭を使わなくてはならない

knowledge3.indd 122 2017/04/07 21:09:52

こと」となり、不便で良かった事や、不便でなくてはダメなことが、色々と見えてくると言う。

川上は不便で良かったことを活用し、システム・デザインに生かしているという。そして、便利の押しつけが、人から生活する事や成長する事を奪ってはいけないという。高齢者の日常にあえてバリアを組み込み、身体能力を衰えさせないデイ・ケア・サービス。車線も標識も信号も取っ払い、安全の担保は人に委ねる道路。電動サポートや自動衝突回避などの機能をあえて付けず、自分の足で漕ぐ車いす。そんなデザインが、世界中で提案され始めているという。

私たちの知識は、あたりまえのことで溢れている。あたりまえのことの知識は頑強で、問い直されることはほとんどない。

児玉徳美は「日常生活で出くわす矛盾や不平等、『あたりまえ』とされている制度や常識などへの疑問は身辺に無数に存在する」という。情報が答えを与えてくれることはない。問題を見つけ、解決の筋道をつける作業は、情報や情報の受け手とは無関係に、人の思考や知識に委ねられている。あたりまえのことに疑問を呈し、それを変えることができるのは、思考であり、知識である。

あたりまえという頑強に変わらない知識ではなく、あたりまえを変えていく知識を持ちたいものだ。

思い込み

フランスの田舎町に行くと、町の中心には、教会と役場と学校がある。この三点セットに、第一次世界大戦と第二次世界大戦に町から出征していって死んだ人たちの名が刻まれた石の慰霊碑があれば、これはもう、間違いなく、フランスの田舎町という感じがする。

knowledge3.indd 123 2017/04/07 21:09:52

なぜかどこの町でも、教会の前には杉のような深い緑色をした針葉樹が植えてあり、厳かな雰囲気を醸し出している。学校にはマロニエのような実のなる木があって、秋になると子供たちが喜んで落ちた実を拾っている。役場の前ではポプラが大きな影を落とし、役場の前にあるカフェがポプラの下にテーブルを置き、大人たちがコーヒーを飲んでいる。

そんな景色に出合うと、不思議と心に残り、フランスじゅうの田舎町がそんなふうだと思ってしまう。そういう景色は多いのかもしれないし、そんなには多くないのかもしれない。

いくつかの印象をつなぎ合わせただけで「フランスでは」などというのは、ただの思い込みでしかないのはわかっているけれど、でも私のなかには、教会の前には杉があり、学校にはマロニエがあり、役場の前にはポプラがある、そんなフランスの田舎町が、知識として残ってしまっている。

暗黙知、形式知

暗黙知（tacit knowledge）とか形式知（explicit knowledge）などと言う。暗黙知は実際的な知識で、個人的な経験を通して得られ、人に伝えるのも人から伝えられるのも難しい。形式知は学問的知識など、文書化され、残され、伝えられることが出来る。そういう説明をされる。

確かにそう分けることも出来る。共同体験などによって暗黙知を得るだとか、暗黙知を形式知に変換するとか、形式知を基に実践を通して暗黙知を得るとか、そういうことを言いたい人の気持ちは、とてもよくわかる。でも、「データ・情報・知識」というモデルを使っている私には、暗黙知こそが知識で、形式知は単なる情報でしかない。

knowledge3.indd 124 2017/04/07 21:09:52

マニュアル、数式、著作権、特許などが、形式知の例としてあげられるけれど、そしてそれらは確かに誰かの知識を文字や数字にしたものではあるけれど、その文字や数字を見たからといって、それが見た人の知識になるわけではない。それらは単なる情報でしかないのだ。

知識はあくまでも頭のなかのもの。暗黙知は体が覚えているとかいっても頭のどこかにあるわけだから、知識といっていい。形式知はそれを文字や数字にした人にとっては知識だけれど、それを受け取った人にはただの情報。そう考えた方が、「データ・情報・知識」というモデルで考えた時には、わかりやすい。

知識を情報として与えても、受け取る側の知識になるとは限らない。そういう意味では形式知だから共有できるというのは間違っている。

そして「暗黙知は形式知にしなければ共有できない」というのもおかしな話だ。暗黙知は暗黙知のままで共有されることが多い。形式知にできないから暗黙知ではないのか。暗黙知を形式知に出来るのだったら、伝統工芸はコンピュータに置き換わり、人間国宝の価値はなくなってしまう。

暗黙知は、簡単には伝えられないからこそ、暗黙知なのだ。

ところが『まんがで気軽に経営用語』というサイトは、「マニュアルなどの目に見える形に言語化された形式知だけではなく、ノウ・ハウや職人技といった上手く言葉で表現できない暗黙知もしっかりと管理していく必要がある」という。目に見えなく言語化されていない暗黙知もしっかりと管理し組織内で共有できるようにしていけば、組織の生産性も向上するというのだ。

「あの仕事は山崎さんが休暇を取っているから全然進まない」という状況はダメで、「担当の山崎さんが休みだけど、文章化されている手順を見て鈴木さんが対応する」という状況がいいという。

どうしてこんな不可能なことを可能だと考える人が出てきたか。その裏には、１９９３年に出版された

knowledge3.indd 125 2017/04/07 21:09:52

野中郁次郎と竹内弘高の『知識創造企業（The Knowledge-Creating Company）』という本がある。その本には、個人・集団・組織の間で、暗黙知と形式知が相互に絶え間なく変換し、移転すると書いてあり、日本人の多くがそのことを信じているという。

野中と竹内が提唱したサイクルは、

1・共同体験などによって、暗黙知を獲得し、伝達する。
2・得られた暗黙知を共有できるよう形式知に変換する。
3・形式知を組み合わせて新たな形式知を創造する。
4・形式知を基に実践を行い、暗黙知として体得する。

というもの。つまり、暗黙知は形式知に変換し表現することができ、形式知は暗黙知に変換し体得することができるというのだ。そればかりではない。このサイクルのなかでは、暗黙知は獲得でき、形式知は創造できるのだ。組織のなかで「あの人にしかできない」とか「あの人にしかわからない」ということをなくそうという、組織にとっては都合のいい話なのだが、はたしてそんな都合のいいことが起こるのだろうか。

ビジネス・スクールの人たちとか、ビジネス・コンサルタント会社の人たち以外に、暗黙知を伝えることができるなどと言う人は、まずいない。ビジネスを専門とする人たちも、そんなことが簡単にできるとは思っていない。

例えば、リチャード・エナルス（Richard Ennals）、ピーター・トッターディル（Peter Totterdill）、ロバート・パリントン（Robert Parrington）の3人の名前で書かれた『知識は伝えられるか？（Can Knowledge Be Transferred?）』という論文がある。

本は人々のあいだを移り動くことができる。でも知識の移転はそんなに簡単ではなく、文化の移り変わり

knowledge3.indd 126 2017/04/07 21:09:53

のように複雑だという。知識も文化も社会的なものなので、個人が所有できる本のようにはいかない。そして「特に、生活や言語に影響され、経験を通して得られる類の暗黙知の移転は、とても難しい」とはっきり書いている。

もっともそこからはビジネスを専門にする人のトーンになる。経験を共有することができ、知識に実用的な意味を与えることのできる環境。イノベーションについていえば、新しいアイデアが出て来て、それが開発や製品化に繋がるような環境。職場についていえば、対話や生み出し、パートナーとの良い関係を持ちうる環境。そんな環境を作りさえすれば、知識の移転はそんなに難しくなくなるという。

でも、そんな環境を作るのは容易ではない。しかも、そんな環境を作ろうとするような組織が、出てくるわけがない。出てきても成功するわけがない。そして、たとえそんな環境ができて知識の移転が容易になったとしても、暗黙知の移転が容易になるわけではない。私は3人が書いた論文を読んだあとでも、暗黙知の移転は不可能だと感じている。

繰り返しになるが、暗黙知は、簡単には伝えられないからこそ、暗黙知なのだ。

共感

ジーン・ディセティ（Jean Decety）とウィリアム・イッキス（William Ickes）が指摘した通り、かつては哲学と心理学の学者たちだけのものだった「共感（empathy）」が、垣根を超え、話されたり研究されたりするようになった。政治やビジネスは「共感」を得ることに全力を尽くすようになり、芸術や科学までもが「共感」を気にするようになった。

knowledge3.indd 127　2017/04/07 21:09:53

インターネットの普及は、「共感」を主役の座に引きずり出し、個人までもが「共感」を求めるようになった。そして今、共感がすべてを決める。共感を得る文章が並ぶ本は売れ、共感することのできない本は売れない。科学にしても、共感が得られなければ、資金集めさえままならない。インターネットで多くの人の共感を集めれば、どんなことでも正しいことになってしまう。そういう風潮すらある。

ハインツ・コフート（Heinz Kohut）は、共感を「他人の内面のなかに、自分自身を感じることだ」という。他人の経験をまるで自分の事のように、五感のすべてを使って感じ、考え、理解する。そういうのが共感だという。

インターネットやテレビ・ラジオは、視覚や聴覚に訴えることはできても、触覚や味覚や嗅覚に訴えることはできない。それでも、震災のあとの執拗なまでの「共感キャンペーン」を目の当たりにし、「つながる」とか「忘れない」などという言葉の氾濫を経験してしまうと、メディアが私たちに与える影響の強さには身震いする。

ポール・ブルーム（Paul Bloom）は「共感は、いいことばかりではない」と書いている。ブルームが書いていることに賛成する人は多くないようだが、読んでみるとそのひとつひとつのことに、妙に納得する。

人は他人に共感すると、他人の身に起きていることをまるで自分のことのように感じる。だから共感は、人のことを気に掛けたり、親切にしたり、助けたりという行動につながる。募金箱におカネを入れ、誰かを助けた気になる。人に親切にして「ありがとう」と言われ、自分をもっと好きになる。人を助けることで温かい気持ちになり、そんな自分に満足する。そんなことはどれも、悪いことではない。自己満足とはいえ、いいことなのかもしれない。

ただそんな共感が社会のなかで強くなってくると、「世界では何が必要で、どこを手助けすれば状況がよ

knowledge3.indd 128 2017/04/07 21:09:53

くなるのか？」などと考える人たちが出てくる。そして「どうお金を使うべきか？」にまでなってしまう。善意に基づく共感は、場合によっては戦争の原因となり、場合によっては悪を助長する。共感という感情移入は、モラルという観点から考えると、決して良いものとはいえない。むしろ、世界を悪くする場合のほうが多いのだ。

共感が集まり社会のなかで強まると、その思いやりは行動を引き起こす。苦しんでいる人を助けたいという感情は、悪を懲らしめる正義の行動となり、つまりは戦争に向かってしまう。これを「早計すぎる道徳的判断だ」などと言う人がいるが、戦争を引き起こしたという一点で、共感は悪の原因になったと言えるのだ。

共感は人を盲目にする。そして、「自分の行動がどのような結果を生み出すのか？」ということをわからなくしてしまう。苦しめられている人たちを救おうという共感から始められた戦争は、より多くの人たちを苦しめる。「これから起こす行動で、どれだけの人たちが苦しむことになるのか」ということが考えられなくなった時、戦争が始まる。

共感によって全体像を見落とし、「苦しんでいる人を解放するために、攻撃を開始しなければ」と言っていた人たちが、何か月かたって「大勢の人が死に、状況はさらに悪くなった」と気付く。共感は、「どうしたら人を助けられるのか？」ということを考える時には、大きな邪魔になる。

共感がなによりも大切な日本の社会では、ブルームが言っていることは特に重要だ。でもブルームが言うことには、誰も耳を傾けない。戦時中の「欲しがりません、勝つまでは」から、震災後の「忘れない」や「つながる」まで、大合唱や共感の嵐はいつも凄まじい。多くの日本人が共感したとき、それに異を唱えるのは、ほとんど不可能になる。ほんとうに恐ろしい。

死刑はリンチと同じ。死刑制度を廃止しよう。そういう考えが世界中に広まり、今でも死刑を執行してい

knowledge3.indd 129　2017/04/07 21:09:53

のはわずか二十数か国。そんな状況のなか、94歳になる瀬戸内寂聴が、死刑存続を推し進める人たちのことを「殺したがるバカども」と言った。至極まともな発言なのに、日本中がその発言を批判した。犯罪被害者遺族への共感が、どんな論理にも勝るのだ。

戦時中には「兵隊さんが戦地でお国のために戦っているときに」などという常套文句が横行したが、これも苦労している兵隊さんへの共感がベースになっている。

インターネット上の共感は、まるでいいことかのように扱われている。共感の恐ろしさを知らないでいると、とんでもないことが起きてしまうというのに、みんなあまりにも無防備だ。

遠い国

ベラルーシという国がある。ソ連から独立し、ベラルーシ化を推し進めてきた。アレクサンドル・パプコ（Александр Папко）がそんなベラルーシの現状を新聞に書いている。

パプコによれば、ベラルーシ化は一部のエリートたちのあいだだけで進行しているという。大部分の人たちのあいだではむしろ、ロシア化が進んでいるというのだ。政府系のメディアからの公式なニュースを見ているだけでは、こんなことすらわからない。実情は公式なニュースからは伝わってこない。

パプコの文章の脇には、一枚の写真が添えられている。写真のなかでは、何人かの若い男たちが、ロシアの旗を立てたクルマを押している。クルマは見るからにおんぼろだけれど、その側面は白、青、赤というロシアの国旗の三色に塗られている。なぜクルマを手で押さなければならないのかはわからないけれど、若者たちの「ロシアがかっこいい」という思いはよく伝わってくる。道路の上で立ちどまった鳩がそのクルマを

knowledge3.indd 130 2017/04/07 21:09:53

眺めているように見えるのだが、その鳩の存在がその写真に作り物ではない感じを与えている。

公式なニュースには、その役割がある。そのほとんどがあまり役に立ちそうな情報なのだが、それを必要としている人たちにとってはとても大事なもの。自分にとってあまり役に立たないからといって、役立たずの情報などと言ってはいけない。

だいぶ前に、ルワンダ虐殺についての会議をやっている会議室の隣で、卵のサイズについての会議が行われていた。ルワンダ虐殺という議題の隣にあって、卵のサイズというのはなんとも間の抜けた感じがする。その会議をオーガナイズしていたのが仲の良い同僚だったので、いったいなんでそんな会議が必要なのか聞いてみた。

その同僚は、「東西の壁が取り払われたおかげで、東ヨーロッパの農産物が西ヨーロッパで売れるようになった。それでいろいろな会議が必要になったのだ」という。私がなんのことかわからないでいると、「少し前までは卵は籠に入れ、手で運んでいた。だから卵のパッケージなんて必要ではなかった。ところがハンガリーの卵をドイツで売ろうとすると、卵のパッケージに入れなければならない。大きい卵はパッケージに入らないし、小さな卵は割れてしまう。だから会議をして、卵を大きさ別に分ける方法とか、パッケージの種類とか、パッケージに入れた卵の運搬方法とかいうような知識を、どうやって移転したり共有したりすればいいのかということを話し合っている」と説明してくれた。

考えてみれば、東ヨーロッパの卵農家にとっては死活問題だ。説明を聞く前に「間の抜けたことを」などと考えた自分のことが、少し恥ずかしくなった。なにが役に立ち、なにが役に立たないか。なにが重要で、なにが重要でないか。そういうことは簡単に言えるものではない。

knowledge3.indd 131 2017/04/07 21:09:53